

十字架と贖い





受ける教会から与える教会へ

13回特別献金日

3月26日

この日に集まった献金総額の25% (1/4) が特別目的のために送られます。そして3/4は他の安息日学校献金、誕生日・聖別献金などと同様に、世界伝道のために用いられます。ちなみに、全世界のわが教団の伝道資金の大半は、安息日学校の諸献金によってまかなわれています。

ハイチの「希望の声ラジオ放送局」は、神の希望のメッセージによって全国をカバーするため、機器を新しくして機能強化することが必要になっています。



安息日学校の目標

- 学ぼう 今日命のみ言葉を
- 祈ろう 友なるイエスに
- 温めよう 主にある家族の交わりを
- 伝えよう 救いの喜びを
- 献げよう 魂の救いのために
- 集まろう 約束の時刻に

※上記の目標をもとに、各教会の必要に合う安息日学校の目標を立ててください。

序言

(十字架と贖い)

「天からの答え」

ドイツの哲学者フリードリヒ・ニーチェは、次のように叫びながら市場の中を走り回る狂人について描いています。

「われわれがこの地球を太陽から解き放ったとき、いったい何をしていたというのだ。地球は今、どこに向かって動いているのだ。われわれはどこに向かっているのだ。あらゆる太陽からか。いや、絶え間なく落下しているのではないか。後ろへ、横へ、前へ、あらゆる方向へ。天や地にまだだれかいるのか。限りない虚無に向かってさまよっているのではないか。空の宇宙の息づかいを感じないか」。

ニーチェがここで言おうとしていることは、現代社会においては、あらゆる道徳的・霊的基礎が打ち砕かれ、破壊され、その結果、人間は目的のない、限りない虚無に向かって、あらゆる方向に、空しく落下している、ということです。

しかしながら、聖書が述べていることはこれとは全く反対です。聖書によれば、私たちはイエスによって永遠に天とつながっています。イエスの

御手の釘、御足の釘は、イエスを十字架に釘づけにしたと同時に、この地をも天に釘づけにしたのです。造られた者は何人もこれを切り離すことはできません。神は十字架を通して、冷たい宇宙の広大な一点に置かれた、このちっぽけな惑星地球に、人間が決して孤独ではないこと、創造主が人間と苦しみを共にすることによって私たちと一つに結ばれていることを示されたのです。

聖書全体を通じて、つまり主がアダムに命の息を吹き込まれた天地創造から人間イエスの誕生まで、神は、御自身が人類と密接にかかわっておられること、人類を御心にかけておられること、人類の運命に関心を抱いておられることを啓示しておられます。キリストの受肉、つまり創造主御自身が被造物のひとりとなって被造物のうちにお住みになったことは、創造主御自身が人類と密接にかかわっておられることの驚くべきあかしです。しかも、創造主のこの受肉は私たちの身代わりとなるため、すなわち創造主御自身が御子において罪に対する御自身の怒りを一身に負うため、私たちをこの怒りから救うためにほかなりませんでした。だれがこの犠牲の意味を理解することができるでしょうか。これは永遠にわたって探究すべきテーマです。

今期の研究は人類の墮落に始まって、(犠牲制度において表された)^{あがな}贖いの計画にまで及びますが、その中心はキリストの死と復活において最高点に達する受難週にあります。キリストの十字架の意味、つまり私たちの救いの基礎である十字架において何が起こったのか、また十字架が私たちに何をもたらすのかについて学びます。

ドイツの詩人リルケは、「もし私が叫ぶなら、天使の中のだれかが聞いてくれるだろうか」と言いました。十字架がその答えです。十字架そのものが天からの答えです。

(著者) ブライアン・D・ジョーンズ
(「多言語聖書伝道」コーディネーター、米国ワシントン州北コロンビア教区)

目次

(十字架と贖い)

序言	2
第1課 挑戦と備え 1月1日	4
第2課 予型に表された神の目的 1月8日	11
第3課 イエスと聖所 1月15日	18
第4課 「体を備えてくださいました」 1月22日	25
第5課 カルバリーの影で 1月29日	32
第6課 受難週 2月5日	39
第7課 カルバリーへの道 2月12日	46
第8課 真昼の闇 2月19日	53
第9課 「復活なさったのだ」 2月26日	60
第10課 十字架の中心 3月5日	67
第11課 十字架と義認 3月12日	74
第12課 十字架と聖化 3月19日	81
第13課 十字架と大争闘 3月26日	88

今期のテキストの翻訳は教団翻訳部、リライトは本郷武彦東京衛生病院チャプレン、毎週金曜日の特別寄稿メッセージは明智信作牧師、イラストは徳前直美さん、校閲・校正は出版編集部、最終校閲を安息日学校協力牧師(板東洋三郎牧師、堀内一誠牧師、安居益也牧師、村沢秀和牧師)並びに教団安息日学校部が担当しました。口語訳聖書、新共同訳聖書からの聖句引用に関しては、日本聖書協会の承認を受けております。



第1課

1月1日

挑戦と備え

● 暗唱聖句 ●

「主なる神は人に呼びかけて言われた、『あなたはどこにいるのか』」
(創世記3:9、口語訳)

「主なる神はアダムを呼ばれた。『どこにいるのか』」
(創世記3:9、新共同訳)

今週の聖句 創世記1～3章

安息日午後

今週のテーマ

12月25日

数年前、ある玩具メーカーが開発した「シンディー・スマート」という名の人形は五つの言葉を話し、文字を読み、時間を教え、簡単な掛け算と割り算ができました。シンディーは教えられたことのできる最初の人形でした。初めてシンディーに出会った人はびっくりしたものです。人形にどうしてこんなことができたのでしょうか。

その答えは、優秀なコンピューター・プログラム、体に埋め込んだ16ビットのマイクロ・プロセッサ、数字と文字を認識する光学スキャナーにあります。シンディー・スマートは「話」をすることのできる最初の操り人形「チャティー・キャシー」の改良型に過ぎなかったのです。

シンディー・スマートは、いかに精巧にできているといっても、所詮、教えられた通りに行うように作られたコンピューターに過ぎません。いかに「頭の良い」人形だとしても、シンディーには自由意志というものはありません。

対照的に、私たちはシンディーよりも多くの言葉を話すことができるという意味で、それとは量的に異なっています。また、道徳的な自由を与えられているという意味で、それとは質的に異なっています。後者はシンディーには全くない特徴です。この自由意志の問題は、罪の発生とその解決について学ぶときに決定的な意味を持ちます。

日曜日

神を愛すること

12月26日

問1 マタイ22:37、申命記6:5、ヨハネ15:9～11を読んでください。それらは私たちにどうするように勧めていますか。従うためには、自由、道徳的自由が必要なのはなぜですか。

「初めに、神は天地を創造された」と聖書は記しています。神はすでに存在する物質や条件に依存されませんでした。神が万物を創造されたのは、その御心の現れである御言葉、“ロゴス”によってでした（詩33:6、9、ヨハ1:1～3）。限りなく完全なお方である神は万物を欠点のないもの、^{うるわ}美しいものとして造られました。神は愛であって、そのなさることはすべて御自身の完全な愛と無限の知恵に従っています。神は御自分の知的存在者に個性と選択の自由という高尚な特性を与えられました。しかし、選択の自由には、その性質上、善と悪のどちらかを選ぶ自由が含まれます。したがって、人間が神に背く危険性は初めからありました。

同時に、神は私たちに対して、御自分との個人的で、相互に満足できる交わりを持つように望んでおられます（詩36:6～11、口語訳36:5～10）。神はまた私たちに、知恵、知識、愛、喜びを与えておられます。こうした特性が真の存在意味を持つのは、自由意志を与えられた者だけに限られません。シンディー・スマートにはありえないことです。

問2 幸福なコンピューター、喜ぶコンピューター、忠実で愛情に満ちたコンピューターというものがあるのでしょうか。知的には驚くほどの離れ業を行うことができても、幸福、喜び、忠実と無縁なのはなぜですか。

神を愛するためには、人間は自由でなければなりません。じつに単純なことです。愛は道徳的な自由なしにはありえませんが、道徳的な自由は悪をなす能力なしにはありえませんが。

「神は、造られたすべてのものから愛の奉仕、すなわち、神の品性を理解することによってわきおこってくる崇敬を受けることを望まれる。神は、強制された服従をお喜びにならない。そして、神はすべての者に自由意志を与えて、彼らが、自発的に神に奉仕できるようになさった」(『人類のあけぼの』上巻3ページ)。

問3 ルシファーはどのように神に背きましたか。イザ14:12~14、エゼ28:14~17

エレン・ホワイトによれば、ルシファーは徐々に自己に心酔するあまり、創造主への愛から離れ、最高の権力と権威を切望するようになりました。彼は、創造主であり、父なる神と同等のお方であるキリスト(ヘブ1:1~3)をねたみ、転覆計画を開始します。彼は悪意を込めて、神が独裁者であり、その律法が独断的であること、被造物に礼拝と奉仕を求めるのは不当であることを暗に宣伝します。道徳的混乱や失敗の傾向を全く持たない完全な存在者として、しかし同時に、自由な道徳的存在者として創造されていた彼は、神との一致から逸脱する自由をも与えられていました。

当然のことですが、態度や行動は結果をもたらします。神の律法から離れることは罪であり(Ⅰヨハ3:4)、罪の支払う報酬は死です(ロマ6:23)。「知恵に満ち、美しさの極み」であり、その「歩みは無垢」(エゼ28:12、15)であったルシファーは、油注がれたケルブとして神のそば近くに住み、最高位の使者として神の啓示を宇宙に伝達していました。このように、彼は主からの離反を扇動したことについて全く弁解の余地のない立場にありました。巧妙に神を誤解させて、ルシファー(墮落後のサタン「敵対者」)は天使の三分の一を誘惑して自分の味方につけました(黙12:4)。

神と神の統治に対するサタンの考えはとうてい受け入れられるものではありませんでした。真理と正義は主観的な意見ではなく、絶対的で、変更できない啓示であって、人の品性と行動に影響を与えるものです。

「恵み深い神は、大いなるあわれみをもって、長い間ルシファーを忍ばれた。不平と不満の精神は、これまで天において起こったことがなかった。それは、初めての不可解な、説明することのできない新しい要素であった。はじめのうちはルシファー自身も、自分の感情の真の性質を理解することができず……その気持ちを一掃しようとはしなかった。彼は、自分がどこまで迷って行くのか見当がつかなかった。しかし、無限の愛と知恵の神の力が、彼の非を認めさせるために用いられた。……彼が、反逆を続けるならば、どんな結果になるかが彼に示された」(『人類のあけぼの』上巻10ページ)。

火曜日

サタンの追放

12月28日

問4 ルカ10:18、黙示録12:4～9を読んでください。天で反逆した後、サタンにどんなことが起こりましたか。

黙示録12:12は地上の住民に注意を促しています。悪魔が怒りに燃えて地上に降^{くだ}って行ったからです。この警告は十字架に関連して、また十字架がサタンにもたらした運命に関連して与えられたものです。しかし、エデンの出来事は私たちも同じように惑いにさらされている「原型」であって、「全人類を惑わす」(黙12:9)悪魔が今も、私たちを欺くために働いていることを教えています。

問5 創世記3:1を読み、それを2:16、17と比較してください。サタンはどんな策略を用いますか。

サタンは巧妙にも、真理と虚偽を混ぜ合わせたものを用いています。彼は神からの直接的な命令を用いて、あたかも神の言われたことをそのまま繰り返しているかのように言い直しています。しかし、彼は神の言葉に異なった解釈を与えています。言い換えるなら、サタンは、虚偽が真理のように聞こえるように、虚偽に必要なだけの真理を混ぜ合わせているのです。

問6 創世記3:2、3を読んでください。エバは神の命令を知っていましたか。彼女の行動の責任はだれにありますか。

エバは確かにだまされはしましたが(1テモ2:14)、彼女の言葉を見れば、彼女が神の命令を知っていたことがわかります。これは私たちのための力強い教訓です。つまり、たとえ特定の状況を理解していないとしても、もし神の明らかな命令にさえ従っているなら、多くの心痛、罪、虚偽を免れることができるということです。エバの罪は嘆かわしいものですが、アダムもまた知っていながら罪を犯したのです。たとえ全く知らなかったにしても、また神の道を十分に理解していなかったにしても、神の道が最善であることを信じて、神に従っていたなら、彼らは偽りを免れることができたはずでした。

サタンの巧妙なうそに乗せられて、人類は罪を犯してしまいました。その瞬間、天と地の関係に大きな変化が生まれました。楽園の理想的な枠組みが急激に変わり、エデンの調和と平和、均衡が失われました。このときから、宇宙の歴史が変わります。それまでは自分自身と墮落天使に限られていたサタンの反逆が、新たな世界に入り込む足がかりを得たのでした。問題はいよいよ重大になってきました。

問7 創世記3:9を読んでください。神が墮落した人類に対して最初に言われたことは何でしたか。この言葉が今日の私たちにとっても重要なのはなぜですか。この言葉のうちに何の予表を見ることができますか。

ヘブライ語の「アヤカー」は「どこにいるのか」と訳されています。このように、神が墮落した被造物に最初に語られたのは質問の言葉でした。これは、ある意味で、神がそれ以来ずっと発しておられる質問です。神のこの質問は、神が彼らのいどころを知るためのものではなく、むしろアダムとエバを自らの行為に対峙させるためのものでした。

「アヤカー」。ここに見られるのは有罪の宣告ではなく、アダムとエバ、またそのすべての子孫に対する最初の呼びかけです。自らの罪深い状態と必要を認めるようにという呼びかけ、彼らを救われる神がここにおられることを認めるようにという呼びかけです。

「アヤカー」。神は彼らのもとに来られます。神は彼らを尋ね求めておられます。私たちはしばしば創世記3:15を、福音についての最初の約束であると考えます。しかし、すでにここに、この単純な「アヤカー」という問いかけのうちに、恩恵期間が終了するときまで、私たちが尋ね求め、率先して私たちが救われる主の姿を見ることができます。

◆ ヨハネ3:16、ローマ8:3、ガラテヤ4:4、1ヨハネ4:10を読んでください。これらの聖句はどんな意味で創世記3:9の内容を反映していますか。これらの聖句のうちに、どんな原則を見ることができますか。あなたはこの原則を体験していますか。

木曜日

神の介入と福音の予告(創3:15)

12月30日

アダムとエバは、禁じられた木の実を食べた後すぐに、自分たちの犯した重大な過ちに気づきます。彼らは自分たちの魂の中に言いようのない不安を感じ、重大な何かが失われたのを知ります。神との自然な調和の現れである、美しい光と栄光の衣が消えていました(創3:7)。彼らは裸と恥の中に立ち、神との日ごとの交わりと教えから来るいつもの喜びは失われていました(8節)。

問8 アダムとエバはどのようにして自分たちの裸を隠そうとしましたか(創3:7)。このことは、自分の罪の結果を矯正し、道徳的状态を改善しようとする人間的な努力に関してどんなことを教えていますか(イザ64:6、ロマ10:3)。カインの献げ物はどんな意味で、これと同じ原則を表していますか(創4:3)。

アダムとエバの墮落は、神にとって驚きではありませんでした。彼らが墮落し、その罪を告白するや否や(創3:12、13)、神は創世記3:15にある大いなる希望を与えられます。これは福音についての最初の約束であると考えられています。

問9 創世記3:15を読んでください。それは墮落した夫婦にどんな希望を与えていますか(ロマ16:20、エフェ6:11、11テモ2:26、ヘブ2:14、Iヨハ3:8、黙20:10参照)。

主は蛇に対しては質問をしておられませんし、告白を要求してもおられません(創3:14)。蛇に対してただ有罪の宣告を下す一方、次の聖句でアダムとエバに希望の約束を与えておられます。この約束には、罪とその創始者であるサタンしゅうせんの終焉が含まれています。この裁きの場面においては、神の永遠の福音の栄光が現されています。そこにはまた、神の御心と恵みの秘められた真理が現されています。

◆ あなたは次のような批判に何と答えますか。「神はなぜアダムとエバをあんなに厳しく扱われたのか。たかが果物をひとつ食べただけで」。

ヨシュア記24：15、ヨブ記1：6～12、38：4～7、黙示録22：17、『人類のあけぼの』上巻1～16ページを読んでください。

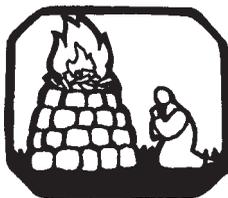
「神は、不満の精神が熟して行動的な反逆になるまで、サタンが働きを進めることをお許しになった。サタンの計画の性質と傾向がどんなものであるかが、すべての者に理解されるように、その計画が十分に実行される必要があった。……

したがって、天の住民と、すべての世界の前に、神の統治は正しく、神の律法は完全であることを示す必要があった。サタン自身は、宇宙の福利を増進しているかのように装っていた。横領者の真の性質、彼のほんとうの目的がすべてのものに理解されなければならなかった。彼の正体が彼自身の悪い行為によって露見するために時間が必要であった。……

もしもサタンが、直ちに滅ぼされてしまったならば、愛からではなく、恐れから神に仕える者も起こったことであろう。欺瞞者の影響は完全にぬぐい去られず、反逆の精神も根絶されなかったことであろう。全宇宙の永遠の福祉のために、サタンに、彼の主義主張をもっと展開させなければならなかった。それは、すべての造られた者が、神の統治に対するルシファーの非難の正体をほんとうに悟るためである。そして、神の公平とあわれみ、神の律法の不変性に対する疑惑が永久に除かれるためである」(『人類のあけぼの』上巻13～15ページ)。

罪を犯したアダムとエバに対する神の扱いが厳しい、と感じる方がおられるようです。むしろ神は、人間の自由意志を尊重し、人間が選択した結果を、人間自身が背負うことを許されたのでした。それは、神のかたちにかたどって造られた人間が人間であるために、決して崩せない一線でした。全知全能の神ですら、その全能をもって侵すことができないと判断されるほどに、自由意志を尊重された、ということです。自由意志が与えられ、自由に選択できるということは、それほどにすばらしい特権です。ただし、選択の結果に関しては責任が伴うことを、神は、人間が自分の罪の結果から学ぶことを許されました。しかし神は、宣告と同時に、救い主を約束されました。すなわち、神は、人類を罪とその結果である永遠の滅びから救うために、神自ら、御子の命によって、ご自身を犠牲にするという大きな痛みと苦しみを経験されたことを忘れてはならないと思います。

〈寄稿メッセージ〉



第2課

1月8日

予型に表された神の目的

● 暗唱聖句 ●

「アブラハムは言った、『子よ、神みずから燔祭はんさいの小羊を備えてくださるのであろう』。こうしてふたりは一緒に行った」

(創世記 22 : 8、口語訳)

「アブラハムは答えた、『わたしの子よ、焼き尽くす献げ物の小羊はきつと神が備えてくださる。』二人は一緒に歩いて行った」

(創世記 22 : 8、新共同訳)

今週の聖句 創世記 4 : 1 ~ 8、22 : 1 ~ 19、民数記 21 : 4 ~ 9

安息日午後

今週のテーマ

1月1日

クリスチャンにとって重要な真理の一つは、救いがいつでも唯一の方法、つまりイエスの犠牲の死によってのみ達成されるということです。イエスの御名を知っていると否とにかかわらず、人が天国に入るのはただイエスによってです。救いの計画をよく知っている人もいれば、ほとんど知らない人もいます。あふれるばかりの光の中に住んでいる人もいれば、影の中にしか住んでいない人もいます。

しかし、影の中に住んでいるといっても、全くの闇の中に住んでいるわけではありません。影のあるところには、必ず光があるからです。影は光の輪郭であって、光の縁ふちにできるものです。光のないところにはできません。影は光を理解する助けになります。

今週は、影の中に住んでいた人々について考えます。この影は、必ずそこに光があったことの証拠です。カルバリーにおいて完全な啓示が与えられる前から、どんな方法によって世を罪から救うかを、主は御自分の民に教えておられました。主は影を通して彼らに教えられました。

問1 聖書はいろいろな言葉を用いて罪の概念を表しています。次にあげるのは最も一般的な言葉とその意味についての説明です。後にあげた聖句を読んで、その意味を確認してください。

(旧約聖書)

1. “ハタット”——「目標をそれる」「的をはずす」(レビ5:5、詩編51:4)。
2. “アーウォーン”——曲がり、偽り、ゆがみを意味する「不正」(創15:16、イザ43:24)。
3. “ペシャ”——規則や権威を故意に犯すこと。神に対する反逆。時に「不義」と訳される(イザ1:2、アモ4:4)。
4. “リシャ”——字義的には「固定されていない」「ゆるい」の意味で、悪全般を表す(創18:23、出23:1)。

(新約聖書)

1. “ハマルティア”——字義的には「目標をそれる」だが、新約聖書では神に敵対しようとする人間の傾向を表す(ヨハ19:11、Ⅰヨハ1:8)。
2. “パラコネー”——字義的には「聞き逃す」または「聞こうとしない」だが、しばしば「不従順」と訳される(ロマ5:19、ヘブ2:2)。
3. “パラプトーマ”——踏みはずすこと、失敗、落下を意味するが、一般的には「侵害」や「違反」と訳される(マタ6:14、ロマ4:25)。
4. “アノミア”——律法を無視すること、犯すこと。ヨハネの手紙1の3:4にある「法に背く」はこの言葉から来ている(マタ7:23、ヘブ1:9)。
5. “アディキア”——「不義」を意味する(ロマ1:18、Ⅱペト2:15)。

◆ 罪という概念には、「目標を逸れる」「ねじれる」「聞き逃す」「反逆」など、いろいろな意味があります。このことから、罪が様々な理由にもとづいて、様々な現れ方をすることがわかります。今日の研究から罪について学んだことがほかにあれば書いてください。

月曜日

罪の危機(2)

1月3日

「この世全体が悪い者の支配下にあるのです」(Iヨハ5:19)。

罪の中にある私たちに、罪の重大さを本当に理解できるでしょうか。実際には、できません。それは、真っ暗な部屋の中で黒板を探すようなものです。しかし、完全には罪を理解することができないにしても、罪の恐ろしさを知るには十分なだけのことは理解することができます。

問2 家族、友人、隣人の中から、あなたの親しい人を3人選んでください。それらの人たちを苦しめている罪について考えてください(必ずしも自分自身の罪とは限らない)。

どんなことについて考えましたか。病気、死、犯罪、暴力、苦しみ、疎外、憎しみ、恨み——あげれば、きりがありません。これらの罪を、これまで生きていた人、またこれから生きる人の人数に掛けてみてください。そうすれば、罪の恐ろしさが少しはわかるかもしれません。

しかしながら、罪の持つ物理的な破壊力は問題の一部に過ぎません。罪は物理的な問題よりもはるかに根深い問題を含んでいます。結局のところ、罪は神の主権・支配に背くことです。それは自分の人生、行為、最終的な運命における神の権威を拒むことであって、必然的に苦しみと死をもたらす様々な道徳的、霊的、倫理的行動となって現れます。

罪を正しく理解するためには、罪を私たちと神との関係において理解する必要があります。罪を行為・行いとして理解するのと同じ程度、罪を存在・状態として理解する必要があります。実際のところ、行為・行いは私たちの存在する罪の状態から生まれます。したがって、罪は私たちの行為であるのと同じ程度、私たちの状態でもあります。なぜなら、結局のところ、私たちの行いは私たちの状態を現すものだからです。

◆ 私たちを罪から救うために何が必要であるかを理解するときに初めて、罪の破壊的な性格をいくぶん理解することができます。次の聖句は罪の恐ろしさについて、また私たちを罪から救うために払われた非常手段について、どんなことを教えていますか。ルカ24:7、ヨハ3:14、ロマ3:21~26、IIコリ5:21、Iペト2:24

罪を犯し、主によってエデンの園から追放された後も、アダムとエバは礼拝を通して主との交わりを維持していました。この礼拝の中心は、罪の問題を終わらせる約束の子を待ち望むことにありました。カインとアベルの礼拝行為を見れば、悔い改めと、来るべきメシアに対する信仰のしるしとしての小羊の犠牲が、彼らの礼拝の中心であったことは明らかです。

問3 カインが小羊の犠牲を献げることを拒んだのはどんな動機からでしたか。創4:1~8、 Iヨハ3:11~15

この物語はしばしば、信仰によってキリストの義を受け入れる人たちと、自分の「善い行い」によって救いを得ようとする人たちを対比する初期の実例と考えられています。律法の行いによらず、ただキリストに対する信仰によって救われる(ロマ3:28、ガラ2:16、3:11)ことに反対する人たちは、そのような教えは罪につながると言います。そして、皮肉にも、もし善い行いが人を救わないのであれば、なぜ、わざわざ苦勞し、自己否定までして善い行いをする必要があるのか、と言うのです(ロマ6:1、15)。

問4 創世記4:3~7とヨハネの手紙1の3:12を注意深く読んでください。アベルの行いとカインの行いについて何と述べていますか。カインの行いを何と呼んでいますか。それはなぜですか。これらの聖句は自力で救いを得ようとするということについて何と教えていますか。

カインの行いが悪と見なされているのは、自力で救いを得ようとする態度から出ているからです。一方、アベルの行いが義と見なされているのは、罪に対する犠牲の必要を理解する心から出ているからです。言い換えるなら、自分の救いが全面的に神に依存していること、また身代わりとなるお方〔イエス〕に全面的に依存していることを理解している人だけが、「善い行い」を生み出すことができるということです。行いの価値はそれに至るまでの動機に基づいて判断されなければなりません。したがって、自力によって救いを得ようとする心からなされる行いは悪と見なされ、すでになされた救いに対する感謝の心からなされる行いは義と見なされるのです。なぜだと思いませんか。

水曜日 アブラハムとカルバリ―(創22:1~19、ガラ3:8)

1月5日

ヘブライ語聖書にある最も感動的で力強い物語の一つは、モリヤ山上のアブラハムとイサクの物語です。世界の三大宗教であるユダヤ教、イスラム教、キリスト教は、それぞれの理由から、この物語を大事にしています。クリスチャンはこの物語の中に、救いの計画、即ち私たちのためのイエスの身代わりの死についての予型・象徴を認めています。

問5 創世記22:1~19を読んでください。この物語から、主を知る上で大切などんな教訓を学ぶことができますか。

この物語の中核にあるのは福音の要素、つまり子の身代わりとしての犠牲の小羊です。神はここで、この福音を通して私たちに重要なことを教えておられます。それは、たとえ自分の息子を進んで犠牲として捧げるアブラハムの行為に見られるような(父親としては、息子の代わりに自分が犠牲になりたいと思うはずです)全的な自己犠牲の行為であっても、罪を贖うには不十分であるということです。罪は、罪人である私たちに解決できるような問題ではありません。信仰と服従の心から出たアブラハムの自己犠牲の行為をもってしても不十分でした。罪の問題を解決できるのは主だけです。主だけが必要な小羊(イエス)を備えることがおできになります。

問6 創世記22:8を読んでください。ここに福音がどのように啓示されていますか。アブラハムは自分の言葉を本当に理解していたと思いますか。

ガラテヤ3:7~9には、福音がアブラハムに伝えられたこと、諸国民が彼の子孫によって祝福されることが書かれています(創22:18引用)。明らかに、アブラハムは以前から、救いの計画を理解していたはずですが、しかし、[イサクの代わりに小羊が備えられた]今、救いの計画をさらにはっきり理解したことでしょう。それは痛みを伴う教訓でした。

◆ アブラハムの行いも彼を救うことはできませんでしたが、その行いはどんな点で彼の信仰を表していましたか。このことから信仰と行いの関係についてどんな教訓を学ぶことができますか。

イスラエルの民は長い間、荒れ野を旅し、さまよい歩きましたが、その間、憐れみ深い神は奇跡的な方法によって彼らを炎の蛇やさそりから守られました(申8:15参照)。神はまた彼らの旅を導き、敵対的な部族から守り、水と食物を豊かに備え、彼らの健康を守られました。それにもかかわらず、民は絶えず不平・不満の理由を見つけてはモーセを責めました。彼らの足は回り道をしながらも約束の地に向かって進んでいましたが、その心は確実に滅びに向かって進んでいました。

問7 モーセに対するイスラエルの不平にも、一見、まともに見えるものもありました(民21:5参照)。水と食物は基本的な必要だからです。では、炎の蛇はどうなのでしょう。

話は予想外にも、イスラエルの民が生き延びるためには青銅で作られた炎の蛇を見上げなければなりません。しばしば聖書の中で、また昔の文学において悪の象徴とされている蛇が特に選ばれたのはなぜでしょうか(創3:1、黙20:2)。エレン・ホワイトは次のように記しています。

蛇は「キリストの象徴であった。……こうして、キリストの功績に信仰をいさぐ必要が彼らに示された」(『人類のあけぼの』下巻34ページ)。

ヨハネ3:14、15にあるキリスト御自身の言葉も同じ思想を述べています。最高に良いものを表すために悪の象徴が用いられているのはなぜでしょうか。

ある人たちは、キリストの死そのものの性格にあると考えます。キリストは十字架の上で私たちの罪を負われました。世の罪と悪を負い、私たちに代わって罪と呪いとなられました(Ⅱコリ5:21、ガラ3:13)。キリストが私たちに代わって死なれたゆえに、本来なら私たちを滅ぼすはずの悪のうちに救いを見いだすことができるのです。これはキリスト教信仰の驚くべき逆説の一つです。完全な善である方が十字架上で完全な悪となられました。蛇が全世界の悪を負われたキリストの象徴とされるのはそのためです。

◆ あなたは毒蛇に噛まれたばかりのイスラエル人です。生き延びる方法は青銅の蛇を見上げるしかないと命ぜられます。このことが、信仰によって生きること、完全に理解できないことを信じること、自分の力では自分自身を救うことができないという事実を受け入れることの意味についての良い実例です。なぜですか。

金曜日

今週のメッセージ

1月7日

『人類のあけぼの』下巻21～36ページを読んでください。

「われわれを恵みの契約の祝福にあずからせるのは、キリストの義にほかならない。……われわれは、自分たち自身の功績が、われわれを救うと考えてはならない。キリストが、われわれの救いの唯一の希望である。『この人による以外に救はない。わたしたちを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである』(使徒行伝4:12) (『人類のあけぼの』下巻35ページ)。

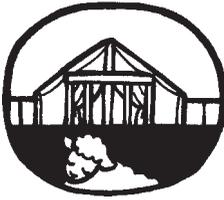
「カインとアベルは終わりの時まで世に存在する二種類の人々を代表している。一方は定められた罪のための犠牲を献げるが、他方は自分自身の功績に頼ろうとする。後者は神の執り成しを伴わない犠牲であって、人に神の恵みをもたらすことができない。私たちの不義が赦されるのはイエスの功績によってのみである」(エレン・G・ホワイト『戦いと勇気』25ページ)。

「キリストが荒れ野でイスラエルの子らに与えるようにモーセに言われたのと同じ教訓が、罪の疫病で苦しむすべての魂に与えられている。キリストは立ち昇る雲の中からモーセに語りかけ、青銅の蛇を造り、それを旗竿の先に掲げ、炎の蛇に噛まれたすべての者に、見上げて生きるように告げよ、と言われた。キリストから命じられたように見上げる代わりに、次のように言ったとしたらどうだろうか。『私は見上げることに何か益があるとは思わない。毒蛇に噛まれた傷はあまりにも大きいのです』。服従はその理由や論拠を尋ねることなしに獲得すべきもの、絶対的で盲目的なものであった。キリストは、『見上げて、生きよ』と言われたのであった」(エレン・G・ホワイト『われらの高き召し』20ページ)。

「罪のために創造主が受けられた苦しみを思う人は非常に少ない。全天はキリストと苦しみを共にしたが、しかしその苦悩はキリストが人性をとって現れたときに始まったのでもなければ終わったのでもない。十字架は、罪が初めてあらわれたときから神の心に生じた苦痛を、われわれの鈍い感覚に示すものである」(『教育』311ページ)。

キリストは「世のはじめからほふられた小羊」(黙示録13:8、詳訳聖書)でした。神にとっては、人類の墮落と同時に、イエス・キリストの死が現実そのものとなったのです。墮落と同時に、神と御子イエス・キリストの苦しみがすでに始まっていたということです。罪のために創造主が受けられた苦しみと、そこに示された贖いの愛の大きさを瞑想したいものです。

—〈寄稿メッセージ〉—



第3課

1月15日

イエスと聖所

● 暗唱聖句 ●

「義なるわがしもべはその知識によって、多くの人を義とし、また彼らの不義を負う」
(イザヤ書 53 : 11、口語訳)

「わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために 彼らの罪を自ら負った」
(イザヤ書 53 : 11、新共同訳)

今週の聖句 出エジプト記 24 : 5 ~ 8、25 : 8、29 : 12、30 : 10、
レビ 10 : 18、イザヤ 53 章

安息日午後

今週のテーマ

1月8日

英国生まれの米国の詩人W・H・オーデンは、戦争と荒廃を背景とした詩の中で、人間は「足しげく通う森の中の」、道に迷い、夜を恐れる、「決して幸福でも善良でもない」子どもたちのようなものである、と言っています。

この暗澹とした一節は人間の現状をうまく表現しています。幸いにも、私たちの神は私たちをこの道徳的、物理的苦境から導き出そうとしておられます。エレン・ホワイトも述べているように、罪が発生すると同時に、救い主がおられました。救い主は各時代を通じて、ご自身と私たちに対するみこころ、まさにあまり幸福でも善良でもない、道に迷った、恐れる者たちのための、救いと希望、永遠の命について啓示してこられました。何世紀にもわたって、神が御自身とのみこころを啓示された主な方法は、地上の聖所における儀式を通してでした。それは救いの計画のモデルとなるものでした。

今週は、この聖所の儀式について、また主がこの儀式を通して御自分の民に何を教えようとしておられるのかを学びます。それによって、オーデンの詩に出てくる子どもたちとどこか似ている私たちは、恵み深い神の与えておられる希望にあずかることができます。

日曜日

聖所以前の犠牲

1月9日

先週の研究では、旧約聖書に出てくる初期の犠牲のいくつかについて学びました。面白いことに（すでにお気づきかもしれませんが）、聖書にはこれらの犠牲の起源や目的についての説明が全くありません。聖書はただ、犠牲が献げられた事実しか記していません。

問1 書かれた状況は異なっていますが、カインとアベルの物語（創4:4）、洪水物語（同6～8章）、アブラハムとイサクの物語（同22:13）には、一つの重要な共通点が見られます。それは何ですか。

これら聖所以前の記録の中では、礼拝が犠牲、血、「無傷の」動物の死に中心を置いています。聖書そのものは犠牲の目的に関してほとんど述べていませんが、動物の死が記述の中心にあることには変わりありません。これらの死のうちに、犠牲をささげることそれ自体を神に受け入れさせる何かがありました（カインの献げ物に対する主の応答とアベルの献げ物に対する主の応答を比較してください）。このことは、箱舟から出た直後におけるノアの犠牲についても言えます。

問2 創世記8:21、22を読んでください。ノアが献げた犠牲と「人に対して大地を呪うことは二度とすまい」という主の言葉との関係に注目してください（創9:8～17参照）。これらの聖句にどんなことが示唆されていますか。ここに、救いの計画がどのように予示されていますか。

十字架よりもずっと以前のここにおいてさえも、大いなる救いの計画、すなわち私たちのために献げられた犠牲のゆえに喜んで私たちを赦してくださいる神をかいま見ることができます。「人が心に思うことは、幼いときから悪い」にもかかわらず、神はノアの献げた犠牲を世のために受け入れてくださいました。

◆ 聖書の記録によると、ノアが箱舟を出てから最初にしたことは、祭壇を築いて、主に犠牲を献げることでした。このことは、私たちの生活の中で、礼拝、感謝、賛美という具体的な行為においても、主を第一にすることについて何を教えていますか。

アダムとエバが罪を犯したとき、人類は神から離れてしまいました。神は聖なるお方で、人類は汚れた存在です。問題は、聖なる神がどのようにして汚れた人類に近づくかということです。地上の聖所にその答えがあります。

問3 出エジプト記25:8を読んでください。神がヘブライ人に聖所を造るように命じられたのはなぜですか。

聖所は神と人との会見の場でした。このことは、聖所が「会見の幕屋」（会衆の幕屋）を意味することからも明らかです。聖所は主、聖なる神が罪深い、墮落した人類とお会いになる場所でした。主、天と地の創造者が日ごとに御自分の契約の民と交わるるのは、この聖所を通してでした。神はここで裁きを与え（出16章）、罪を赦し（レビ4章）、旅を導き（民9:15～21）、汚れを清め（レビ14:31）、民と交わられました（出25:22）。それはイスラエルの礼拝の中心、神の啓示の中心、民が神との契約の祝福にあずかる場でした。

問4 聖所だけが、神が特別な方法で御自分の民と交わる場所でしたか。出エジプト記12、20章はどんな手がかりを与えてくれますか。

もちろん、主は聖所を通してのみ御自分の民と交わられたのではありません。しかし、聖所は神が彼らと共に宿り、彼らと交わる特別な方法でした。神がなぜそのような方法を選ばれたのかについて、聖書は何も記していません。重要なことは、聖なる神がこの方法によって民に御自身を現され、民もまたそれによって神と交わり、神の御心を理解することができたということです。

◆ 神が聖所で御自分の民と共に宿ることによってどんなことがなされたか復習してください。人となって私たちの間に宿られたイエスは（ヨハ1:14）、どんな意味で、いま私たちのために同じことをしておられますか。

火曜日

血と聖所

1月11日

昨日の研究では、聖所は聖なる神が罪人の間に住み、罪人と交わられる方法であることを学びました。しかし、聖所の建物そのものに、人が主に近づき、主を礼拝し、主と交わることを可能とする特別な機能があったわけではありません。何かほかの要素、建物そのものにはない何かがありました。

問5 レビ記17:11を読んでください。ここで、決定的な要素とされているものは何ですか。罪深い人間が聖なる神に近づく上で、それが重要な役割を果たすのはなぜですか。

問6 出エジプト記24:5～8、29:12、30:10、レビ記4:17、10:18を読んでください。これらの聖句に共通しているものは何ですか。

旧約聖書の聖所の儀式をざっと読んだだけでも、血が儀式全体の中心にあることがわかります。無傷の羊、牛、山羊が様々な儀式において屠ほふられています。それは、民と神との契約ひじゅんの批准ひじゅんから(出24:5～8)、罪を犯した祭司あがなの贖あがない(レビ4:3～7)、清めの儀式(レビ15:25～30)、さらには贖罪日における共同体の献げ物(レビ16章)にまで及んでいます。これらはみな、犠牲と血が地上の聖所の働きにおいて中心的な役割を果たしていたことを示しています。幕屋の儀式は様々な霊的教訓を教えていましたが、これらの動物を犠牲として献げることと、その血を流すことが儀式全体の中心となるものでした。

これは驚くべきことではありません。罪人である私たちは滅びなければなりません。罪が死をもたらすからです。しかし、神は恵みのうちに、逃れの道を備えてくださいました。罪のない方が罪ある者のために死なれるのです(ロマ5:8)。イエス御自身が自らの命を捨てる、つまり血を流されるのです。罪人である私たちが赦されるためです(ガラ1:4、Ⅰペト1:19)。血は命を表すゆえに、流された血は死を表し、それぞれの犠牲の死はイエスの死を表していました。それによって、罪深い人間は完全に創造主に回復されるのです。

聖所の犠牲制度は、神の契約の民が神の御前に出る手段を提供しました。ここで問題となるのは、民が神に近づくのを可能とするこれらの犠牲が何を意味していたのか、またそれがどんな意味でキリストの犠牲を予表するものとなるのかということです。

問7 レビ記5：1、17、17：16、19：17、20：17、20を読んでください。これらの聖句の前後関係から、人が「罪を負う」ことの意味についてどんなことがわかりますか。

ここに述べられている基本的な思想は、人が自分自身の罪と不義に対して責任を負うということです。弁解は許されていません。神の民は神との契約関係に入るように求められています。彼らは神の聖きよさにあずかることを許されています（出19：6、レビ19：2、20：7）。それは神に対する信仰と服従をもって生きることによって可能となります（レビ20：8）。しかし、罪と不浄、律法に対する違反はこの契約関係に破れを生じさせます。罪が解決されないなら、神の民は処罰されます。自分で自分の罪を負うしかないからです。しかし、主は恵みによって、彼らの罪が赦され、罪から清められる道を備えてくださいました。これが聖所の犠牲制度の中心となるものでした。

自分自身の罪を負う人たちが赦されるためには、主に犠牲を献げる必要がありました（レビ5：5、6）。献げる動物や儀式は状況によって異なっていましたが、基本的な思想は同じでした。すなわち、人が負っていた罪と不義は無傷の動物に移され、その動物は罪人の身代わりとなって死にました。これが「贖い」の過程の一部です。

◆ 「贖い」はレビ記4：20、6：7、19：22、民数記15：25で何と同等視されていますか。詩編130：3、4、エフェソ1：7、4：32はイエスによる贖いを理解する上でどんな助けになりますか。あなたはこの素晴らしい約束を実際に体験していますか。

木曜日

究極の贖罪の献げ物

1月13日

問8 昨日の研究では、罪人を赦す手段として罪と不義が無傷の動物に移されたことについて学びました。次の聖句はイエスについてどんなことを教えていますか。イザ53：11、ヘブ9：28、Iペト2：24

これらの聖句が教えているのは、イエスが私たちの罪を負い、そのために罰せられたということです。それは、墮落した人類が救いと赦しを受ける唯一の手段でした。これは地上の聖所の儀式に予示されている大いなる真理です。

問9 イザヤ書53章を読んでください。そこには、キリストが私たちの身代わりとなって死なれることについて何と書かれていますか。

イザヤ書52：13～53：12には福音が凝縮されています。イザヤは人類の忘恩とは対照的に、救い主とその贖いの働きを美しく描写しています。これらの聖句は、地上の聖所の儀式に予示されたキリストの犠牲が身代わりのものであったことをはっきりと示しています。

「この章〔イザヤ書53章〕を研究すべきである。それはキリストを神の小羊として提示している。心が高慢な者たち、魂が虚栄心で満ちている者たちは、この贖い主の描写を眺め、恥辱の中にへりくだるべきである。この章全体を暗記すべきである。それは罪によって汚れ、うぬぼれによって高ぶった魂を従順で謙遜にしてくれる」（『SDA聖書注解』第4巻1147ページ、エレン・G・ホワイト注）。

◆ もういちどイザヤ書53章を読み、人間について述べている部分をすべて書き出してください。そこには、人間がどれほど正確に描写されていますか。そこにどういう意味であなた自身が反映されていると思いますか。同時に、墮落した人類に対するどんな希望が述べられていますか。

『SDA聖書注解』（英文）第4巻1147、1148ページ、『各時代の希望』上巻73ページ、同下巻242、243ページ、『伝道』（英文）612ページ、『各時代の争闘』下巻52～55ページ、『国と指導者』下巻287～292ページを読んでください。

「旧約時代においては、なぜこれほど多くの犠牲の供え物が要求されたのか、なぜこれほど多くの血を流す犠牲が祭壇に引いてこられたのかは、多くの者にとって神秘である。しかし、「血を流すことなしには罪の赦しはありえない」（ヘブ9:22）という大なる真理が、絶えず人々の前に示され、心と思いに刻まれていた。すべての血を流す犠牲のうちに、「世の罪を取り除く神の小羊」（ヨハ1:29）が予表されていた。

キリスト御自身がユダヤの礼拝制度の創始者であった。そこには、霊的な、天の事物が予型と象徴において影として表されていた。……

一つの学ぶべき真理がどの犠牲にも具体化され、どの儀式にも刻まれ、祭司の聖なる務めによって厳粛に説かれ、神御自身によって教え込まれていた。それは、キリストの血によってのみ、罪が赦されるという真理であった。

昔、信じる者たちは今と同じ救い主によって救われた。しかし、それは覆い隠された神であった。彼らは象徴によって神の憐れみを見ていた。……キリストの犠牲はユダヤの制度全体の輝かしい実現である。……今や、すべての者はキリストの功績を通して神に近づくことができる。彼らは祭司や儀式的な犠牲に頼る必要がない。個人的な救い主を通して直接、神に近づく自由がすべての者に与えられている。

思いの全体、精神の全体、心の全体、力の全体が神の御子の血によって買い取られている」（エレン・G・ホワイト『驚くべき神の恵み』155ページ）。

聖所は、人間の罪の身代わりに犠牲となった無垢な動物たちの血にまみれていました。それは、罪の刑罰は死であること、また「血を流すことなしには罪の赦しはありえない」（ヘブ9:22）というあがないの真理を、繰り返し、強烈に印象づけていました。こうして神は、罪に対して鈍感になっている人間に、罪の恐ろしさと、この罪から救うために、どれだけ大きな愛と犠牲が払われたかを教えています。聖所で流された動物たちの犠牲の数は無数でした。それでも、「雄牛や雄山羊の血は、罪を取り除くことができない」のです（ヘブ10:4）。神の御子の命は、無数の動物の犠牲による命よりもはるかにまさっていました。神の御子の流された血に表わされた神の愛と恵みをほめたたえます。

—〈寄稿メッセージ〉—



第4課

1月22日

「体を備えてくださいました」

● 暗唱聖句 ●

「それだから、キリストがこの世にこられたとき、次のように言われた、『あなたは、いけにえやささげ物を望まれないで、わたしのために、からだを備えて下さった』 (ヘブル 10:5、口語訳)

「それで、キリストは世に来られたときに、次のように言われたのです。『あなたは、いけにえや献げ物を望まず、むしろ、わたしのために体を備えてくださいました』 (ヘブライ 10:5、新共同訳)

今週の聖句 ヨハネ1:1~3、フィリピ2:5~8、ヘブライ1:8、9、5:7~9

安息日午後

今週のテーマ

1月15日

今から約2400年前、ギリシアの悲劇詩人エウリピデスは悲劇『アルケステイス』の中で、自分の身代わりになって死んでくれる者を見つけなければ早死にするように運命づけられたテッサリアの王アドメトスについて描いています。彼は自分の父、母、親戚、友人にそのことを話しますが、すべての人から断られます。ただひとり妻のアルケステイスだけが犠牲となることに同意します。妻の死後、アドメトスは彼女の死を嘆いて、次のように言います。「ああ、わが妻よ、余は1年、いや死ぬまで、お前のために嘆く。余を産んだ女を呪い、父を憎む。その愛は言葉だけで、行いが伴っていないかった」。

エウリピデスの悲劇が扱っているテーマはいくつかありますが、最も重要なものは他人のために自分自身を犠牲にする自己犠牲ということです。私たちクリスチャンはここに、ひとりの王のためでなく価値なき世界のために御自身を犠牲にされたという気も遠くなるようなイエスの物語を見ることができます。今週は、この信じがたい自己犠牲の模範、すなわち私たちの身代わりとなって御自身の命を献げられたキリストに目を向けます。

イエス・キリストが人性を取ることによって私たちのために何をしてくださったのかを理解するためには、まずイエスがどのようなお方であるのか、イエスがどこから来られたのか、そして地上の母マリアを通してこの世に来られるまではどのようなお方であったのかを理解する必要があります。しかし、これらの事柄を理解することはそれほど容易ではありません。背景にある思想が途方もなく深遠だからです。私たちにできることは、聖霊の導きによって、自分の理解力の限界を知り、神から与えられた啓示を感謝して受け入れることだけです。

問1 ミカ書5:1（口語訳5:2）、ヨハネ1:1～3、6:62、8:58を読んでください。これらの聖句は人間として地上に来られる以前のイエスについてどんなことを教えていますか。

これらの聖句は重要なテーマ、つまり受肉以前の、イエスの先在について述べています。それらは、とりわけ、イエスが神であって、地上に来る前から存在しておられたことを教えています。彼は単なる偉大な人間、偉大な教師、霊的指導者ではありません。イエスは神でした。神としてのイエスは人となる前から存在しておられました。事実、イエスは永遠に存在されます。キリストが神であることは聖書に一貫して流れているテーマです。イエスは父なる神のもとから来て（ヨハ16:28）、父なる神と一つであり（10:30）、父なる神と共に永遠に存在されます（1:2）。イエスの存在されなかった時はありません。そうでなければ、彼は被造物であることになります。聖書はそのようには教えていません。

◆ 父なる神と永遠から共存されるイエスが人となられたという偉大な真理の意味について考えてください。この真理について理解することは、私たち自身とこの世界に対する考えをどのように変えますか。人類が直面している重要な問題は、「この宇宙が友好的か」どうかということである、と言った人がいます。キリストの神性と先在についての私たちの理解がこの問題に答える上でどんな助けになるか話し合ってください。

月曜日

神と人の身分で

1月17日

現代人にとって、キリストの先在と受肉の思想は、全く考慮に値しないものです。それらは科学以前の、理性以前の時代の作り話です。科学的方法にもとづいて教育されてきた世界にあっては、実験室で、あるいは科学的研究によって理解できることだけが真理と認められます。したがって、イエスの受肉は「理性的な」人間の受け入れられるものではありません。なぜなら、それは現代の科学的研究と実証の範囲を超えたところにあるからです。もしすべての真理がこれらの範囲の中にあるのなら、そのように言えるのでしょうか。しかし、そうでない以上、これらの方法が私たちを必要な真理に導くことはまずあり得ません。むしろ、私たちがこれらの真理について知るのには、そのように教えられているからです。

問2 フィリピ2:5～8を読んでください。これらの聖句はイエスについて何と述べていますか。それらはイエスの神としての側面と人としての側面についてどんなことを啓示していますか。

パウロはフィリピ2:6、7で、イエスが「神の身分」でありながら、「自分を無にして、僕の身分」になられた、と述べています。ここで興味深いのは、「身分」（「神の身分」〔6節〕、「僕の身分」〔7節〕）と訳されている語が、何かの付随的で、変化する特性とは対照的な、本質的で根本的な特性を意味する“モルフェー”というギリシア語から来していることです。たとえば、円は緑でも赤でも、あるいは岩からできていてもよいのです。これらは、円が円であるために必要な本質的な要素ではありません。それらはどんなに変わっても、円であることに変わりがないからです。円の“モルフェー”、本質的な形、すなわちその丸さは決して変わることがありません。これこそ、円が円であるために必要なものです。

パウロがここでイエスについて言っているのも同じことです。イエスはまことの神であって、神としての本質的な特性を備えておられました。しかし、彼は自らを低くし、人間、僕としての本質的な特性を負い、完全に人となりました。彼は完全に人であり、同時に完全に神でした。

◆ イエスの神性と人性が人間の科学や研究によってはとうてい解明できません。ほかにどんな重要な真理が科学や哲学の領域外にありますか。

昨日はフィリピ2章について学びました。これに関連して、エレン・ホワイトの次の言葉を読んでください。「ここに人間と神の驚くべき結合を見る。イエスは御自分の神性から人間に生命力と不朽の活力を注ぐことによって、御自分の人性が病気の侵入に耐えるようにすることもおできになった。しかし、彼はへりくだって人性を取られた。彼がそうなさったのは、聖書が実現するためであった。神の御子は、屈辱のあらゆる歩みを、すなわち、へりくだって、有罪となり、苦悩にうめく世の罪を償わねばならないことを知っておられたが、計画を開始された。何という謙遜であろうか。それは天使を驚嘆させるものであった。言葉はそれを描写することができない。想像力もそれを理解することができない。永遠の言なるお方が人となることに同意された。神が人となられた。それは驚くべき謙遜であった」(エレン・G・ホワイト『レビュー・アンド・ヘラルド』1900年9月4日)。

問3 次の聖句はキリストの人性について何と証言していますか。マタ4:1、2、8:24、26:37、マコ2:16、3:5、ルカ2:7、ヨハ4:6、11:41、19:28

マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネは、イエスの生涯と死に対する視点は異なっても、それぞれの方法でイエスの人性について証言しています。食べ、祈り、眠り、渴き、飢え、疲れたお方として、イエスを描写しているからです。彼らにとって、イエスの人性は疑問の余地のないものでした。

しかし、聖書はイエスの人性について証言する一方で、イエスが決して罪を犯されなかったこと、またイエスはその人性において決して肉の誘惑と悪魔の策略に屈することがなかったことを明らかにしています。『ヘブライ人への手紙』には、イエスは「罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われた」と書かれています(4:15)。イエスをよく知っていたペトロは、「この方は、罪を犯したことがなく、その口には偽りがなかった」と記しています(Iペト2:22)。ヨハネは、「御子には罪がありません」(Iヨハ3:5)と言い、パウロはキリストを、「罪と何のかかわりもない方」(IIコリ5:21)と呼んでいます。キリスト御自身、御自分が人間であったにもかかわらず決して罪を犯されなかったことをあかししています(ヨハ8:29、46、15:10)。

水曜日

キリストの神性

1月19日

問4 次の聖句を読み、それらがイエスの神性について何と述べているか書いてください。

ヨハ8：58 _____

ヨハ20：28 _____

ヘブ1：8、9 _____

聖書はイエスの人性について教えていますが、同時にイエスの神性についても教えています。人性を取る以前に存在した神は人性を取った後も同じ神のままです。これは私たちには理解し難い思想です。

しかし、何かを理解できないということは、そのことが真実でないことを意味するものではありません。この世界においてさえ、理解し難いにもかかわらず真実であると信じられていることはいくらかもあります。たとえば、量子論によれば、原子より小さい粒子（亜原子粒子）は〔理論的には実在しても〕人の目には見えません。一般相対性理論によれば、物質は空間と時間を曲げます。人生が現実であると知っていても、実際の人生そのものは理解できない神秘で満ちています。つまり、私たちの周りにあるものはすべて神秘であり、完全には理解できないことばかりです。それなのに、宗教において理解できないことがあると驚くのはなぜでしょうか。だからこそ、聖書は、神の秘められた計画であるキリストについて考えるように教えているのです（コロ2：2、3）。だからこそ、イエスは、御自分についての真の知識は啓示によってのみ与えられると言われるのです（マタ11：25～27、16：17）。

- ◆ 一般の世界であれ霊的な世界であれ、不可能でないにしても理解し難いことで、なおかつ真実であると信じられていることがほかにあればあげてください。理解できないという理由で、何かを即座に否定すべきでないのはなぜですか。

幸いにも、私たちがキリストの御業の祝福にあずかるためには、キリストの性質を詳細にわたって知る必要はありません。神は私たちが救われるために十分なことを啓示しておられます。

問5 ヘブライ5:7~9を注意深く読んでください。ここに、キリストの人性がどのように描かれていますか。私たちの経験はどんな点でキリストの経験と似ていますか。同時に、私たちが自分自身では決して達成することのできなかつたどんなことをキリストは私たちに代わって達成していただきましたか。

ヘブライ5:7~9の、たとえばイエスの肉、涙、苦しみ、従順といった表現のうちに、イエスの人性をはっきりと読み取ることができます。これは多くの点で非常に人間的な印象を与えます。信心深い人間が神に対する信仰と献身をもって、苦しみ、戦いながら生きている姿を見るからです(マタ26:39、27:46、ルカ22:42参照)。

しかし、同時に、イエスは神です。イエスは神として救いの計画を創始し、人としてそれを履行されました。彼は「永遠の救いの源」と呼ばれています(ヘブ5:9)。天使として、あるいは善良な人間としてなら、決して世の罪を贖うことはできなかつたでしょう。被造物は、いかに気高く、清くても、被造物であることに変わりありません。人類を滅びから救うことができるのは神なるキリストだけでした。キリストは人として、完全なきずなで御自分を人間と結び、信仰と服従と苦しみの模範を示してくださいました。一方、キリストは神として、世の罪を贖うに十分な唯一の献げ物を備えてくださいました。このように、救いの計画が実現するためには、キリストは神であり、人である必要がありました。

◆ もう一度、ヘブライ5:7~9を読んでください。あなた自身、主との個人的な歩みの中で、ここに書かれているような経験をしたことがありますか。あなたは苦しみを通して従順を学んでいますか。苦しみと祈りと願いの結果として、あなたの品性はどのように変えられていますか。これらの聖句はどんな意味で、あなた自身の信仰経験を反映していますか。

金曜日

今週のメッセージ

1月21日

「イエスはわれわれ人間の一人として服従の模範を示されるのであった。このためにイエスはみずから人間の性質をとり、われわれと同じ経験をされた。『イエスは……あらゆる点において兄弟たちと同じようにならねばならなかった』（ヘブル2:17)。もしわれわれが、イエスの耐えられなかったことを耐えねばならないとしたら、サタンは、この点で、神の力はわれわれにとって十分ではないと言うだろう。そこでイエスは、『すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである』（ヘブル4:15)。イエスはわれわれの会うあらゆる試みに耐えられた。しかも彼はわれわれに自由に与えられていない力をご自分のためにお用いにならなかった」（『各時代の希望』上巻9ページ）。

「われわれをあがなう計画は、あとで考え出されたもの、すなわちアダムの墮落後に定められた計画ではなかった。それは、『長き世々にわたって、かくされていた奥義』のあらわれであった（ローマ16:25)。それは永遠の昔から神の統治の根本となってきた原則のあらわれであった。初めから神とキリストは、サタンの背信と、この反逆者の欺瞞ぎまん的な力によって人類が墮落することを覚えておられた。神は罪が存在するように定められたのではなく、その存在を予見し、その恐るべき危機に應ずる備えをされたのであった。世に対する神の愛はまことに大きかったので、神は、『み子を信じるものがひとりも滅びないで、永遠の命を得る』ために、そのひとり子を与えることを約束された（ヨハネ3:16)」（同5ページ）。

黙示録21章には、最終的に、この地上に神の都がくだり、全宇宙の中心となることが啓示されています。すでにある神の国をあとにして、なぜ、わざわざこの地上に都を移す必要があるのか、私には不可解でした。「罪ののろいのために神の輝かしい創造における一つの汚点となっていたわれわれのこの小さな世界が、神の宇宙のどんな他世界にもまさってあがめられる」（『各時代の希望』上巻13ページ）ということは理解しにくいことでした。しかし、神の御子が人間の肉体を取ってこの地上にくくだり、33年半、この地上を歩まれ、そして、あの十字架でご自分の命をささげて、人類の贖いを完成し、また、全宇宙に神のご品性が自己犠牲の愛の神であることを実証して、サタンの非難を永遠に沈黙させられ、全宇宙にご自身の品性を擁護されたことを考えるとき、この地球こそ、全宇宙の中心になるのにふさわしい所だったので。人となられた神、イエス・キリストという「言葉では言い尽くせない贈り物について神に感謝」（Ⅱコリ9:15)をおささげします。

—〈寄稿メッセージ〉—



第5課

1月29日

カルバリーの影で

● 暗唱聖句 ●

「その翌日、ヨハネはイエスが自分の方にこられるのを見て言った、
『見よ、世の罪を取り除く神の小羊』」 (ヨハネ 1:29、口語訳)

「その翌日、ヨハネは、自分の方へイエスが来られるのを見て言った。
『見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ』」 (ヨハネ 1:29、新共同訳)

今週の聖句 マタイ 17:1～9、マルコ 8:31、ルカ 9:28～36、24:7
使徒言行録 10:38、39、I コリント 15:13～18

安息日午後

今週のテーマ

1月22日

米国の小説家ソーントン・ワイルダーの小説『サン・ルイ・レイの橋』(1927年)の中に、橋が崩壊して5人の人が亡くなった事故を聞いて、なぜその5人が亡くなったのかを解明しようとした修道士ジュニパーの話が出てきます。彼は宇宙を支配する全能の愛の神を信じていたので、事故の背景には合理的で道理に合った理由があるはずだと考えました。「修道士ジュニパーにとって、そろそろ神学が正確な科学の一つに数えられてもよい時期に思われた」。しかし、結局、せっかく苦心して作ったノート(何年もかけて、事故で死んだ人たちの生涯を調べ上げたものだった)を取り、それを海に投げ捨ててしまいます。彼が最終的に認めざるを得なかったことは、これらの人たちの死には合理的な理由などないということでした。

だれかが前もって修道士ジュニパーに、「合理的な」答えなどない、と告げることができたらよかったのかもしれませんが。この世においては、その答えはありません。あるのはただ、十字架についての啓示、すなわち神御自身がこの世の罪と悪のために死なれたということだけです。十字架に目を向けることによって、たとえ人間の苦しみに対する疑問に答えることができないにせよ、その答えがあること、そしてその答えが啓示される日が必ず来るといふ望みを抱くことができます。

日曜日 キリストの先駆け、バプテスマのヨハネ(ヨハ1:29~34)

1月23日

聖書はバプテスマのヨハネについて詳しくは記していませんが、彼の熱心さ、献身、信仰、そして何よりもその人間性について知るには十分です。私たちは、キリストの初臨の先触れとなったこの燃えるような、決して妥協しない伝道者から多くを学ぶことができます。

問1 神はナザレのイエスとその使命に関して、ヨハネにどんな基礎的な真理を啓示されましたか。ヨハネのこれらの言葉は何を意味していましたか。ヨハ1:29

ヨハネは、イエスを神の小羊として指し示す自分自身の言葉の意味を完全には理解していなかったと思われませんが、それでも彼は聖霊の導きのもとでそのように語ったのでした。ヨハネの使命は、キリストの贖いの犠牲が救いの計画の中心にあることを人々に理解させることにありました。イエスはいやし、教え、伝道し、死人を復活させておられました。それらの働きはすべて、御自身がどのようなお方であるか、またその死によって何を成し遂げようとしておられるのかを人々に悟らせるためのものでした。イエスの死とその結果としての贖いがなければ、ほかの御業はすべて無駄になるのでした。

問2 マルコ8:31、ルカ24:7、コリント1の15:13~18を読んでください。それらは、イエスの死が救いの計画に不可欠であることについて何と述べていますか。

「罪の贖いとしてのキリストの犠牲は大いなる真理であって、ほかのすべての真理はこれに集中している。創世記から黙示録まで、神の御言葉の真理をすべて正しく理解し、悟るためには、それらを通りかかるとしての十字架から流れ出る光によって、また救い主の贖いの、驚くべき、中心的な真理に関連して研究する必要がある。贖い主の驚くべき犠牲について研究する人たちは恵みと知識において成長する」(エレン・G・ホワイト『神の息子・娘たち』221ページ)。

神の御子は、約3年半の間、墮落した人類の間で苦勞して働かれました。各福音書は、イエスが御自分の人性を通して働く神の力によって成し遂げられた数々の良い行いの記録で満ちています。世は、このようないやし主、教師、愛に満ちたお方を見たことはありませんでした。イエスの生涯は、初めから同胞への奉仕のために捧げられたものでした。

問3 キリストの働きとその結果はどのようなものでしたか。マタ4:23～25、8:14～17、使徒10:38、39

使徒言行録10:38、39には、信じがたいほどの逆説が記されています。つまり、イエスは方々を巡り歩いて「良い業」をされたのに、その労苦の報いとして「木にかけて殺」されました。なぜこのようなことが起こったのでしょうか。だれからも親切で、善良で、純粹で、愛の人と認められるお方が、なぜこのような冷たい、憎しみに満ちた仕打ちを受けねばならなかったのでしょうか。その理由はまさにイエスの純粹さ、愛、善良さにありました。

問4 ヨハネ3:19～21、15:17～25、ローマ8:7を読んでください。これらの聖句は上記の疑問を解かううえでどんな助けになりますか。

性急に人を裁き、非難することのないように、私たちは自分自身の邪悪な心に目を向けるべきです(エレ17:9)。自分とは対照的な、すばらしい親切、愛、信仰、寛容、慈愛の持ち主を目の当たりにして、一種の罪悪感、憤り、あるいは憎しみを感じない人がいるのでしょうか。同じ罪人に対してさえそうであるとすれば、イエスと交わるときにはどのように感じるのでしょうか。

◆ 私たちが自分よりも優れた品性の持ち主に対して怒り、憤り、罪悪感を抱くことがあるのはなぜでしょうか。このような感情は自分自身についてどんなことを教えていますか。それらは何についての警告信号ですか。唯一の解決策は何ですか。

火曜日

十字架の予告

1月25日

問5 キリストはその働きのどの段階から、以前にも増して来るべき十字架に言及されるようになりましたか。この時まで待たれたのはなぜだと思いますか。マタ16:13～21、ルカ9:18～22

多くの聖書学者によれば、キリストがフィリポ・カイサリアでペトロから、御自分がメシアであるという重要な告白を受けられたのは、十字架につけられる前の夏（紀元30年の8月か9月）のことでした（『SDA聖書注解』第5巻231ページ参照）。この時点から、イエスは御自分の基本的な使命に関する弟子たちの誤った考えを正し、急速に近づいている厳しい試練に備えるように彼らに教えられます。

問6 弟子たちが差し迫ったキリストの犠牲についての予告を理解できなかったのはなぜですか。マコ9:31、32、ルカ9:44、45

マルコとルカは共に、弟子たちがイエスの言葉の意味を問い正すことを恐れたと述べています。つまり、彼らは知りたくなかったのです。ここに、人間の特性がよく表れています。人間は悪い知らせや、自分の考え・希望に反することを聞きたがらないものです。

数節あとのマルコの記録（マコ9:33、34）のうちに、彼らの態度を理解する鍵があります。彼らはだれがいちばん偉いかをめぐって議論していました。言い換えるなら、彼らは世的な名誉について考えることに忙しく、十字架の恥辱に備える用意ができていませんでした。マルコは二度、弟子たちがキリストの言葉と行いを理解するのに鈍感になっていたと記しています。彼らの「心が鈍く」「かたくなに」なっていたからです（マコ6:52、8:17）。この心のかたくなさは十字架の精神と対立する高慢と虚栄心から来ていました。自己犠牲の愛は、毎日の生活の基礎となる正しい精神ではなく、人生の華々しい名誉に添える珍しい勲章ぐらいにしか考えていませんでした。キリストが自己犠牲の精神から政治の実権を握る機会を辞退されるのを見たとき、弟子たちはキリストの物欲と野心のなさに憤慨しました。

◆ これと同じ精神が私たちの教会や心のうちにも見られないでしょうか。名誉や栄光を求めるのはごく自然なことかもしれません。あなたはどうか。私たちが十字架のもとで碎かれる必要があるのはなぜですか。

問7 マタイ17:1～9とルカ9:28～36を読んでください。これらの聖句は、神の現れを目撃した人の信仰を強めるようなどんな出来事について記していますか。

キリストは、御自分の弟子たちが差し迫った危機に対して全く備えができていないことを知っておられました。宗教指導者たちの反対、バプテスマのヨハネの斬首^{ざんしゅ}、差し迫った苦難についてのキリスト御自身の予告は、弟子たちにとって不吉な前兆でした。この驚くべき神の力の現れ、また弟子たちの前でイエスを支持する天からの声が与えられたのはそのためです。これらはすべて、彼らの信仰を増し加え、そして来るべき試練に備えさせるためのものでした。

問8 モーセとエリヤはキリストについてどんなことを語り合いましたか(ルカ9:30、31)。ふたりが特にそのことについて語り合ったのはなぜだと思いますか。

このとき天から救い主に遣わされたのは力強い天使たちではありませんでした。むしろ、人間としてそれぞれの立場で苦勞と試練を経験したことのあるふたりの人間が、差し迫った十字架の犠牲について救い主と語り合うために遣わされました。言い換えるなら、この信じがたい光景は単に3人の弟子たち(彼らは半ば眠っていた)のためではなく、むしろイエスのため、つまり十字架にかかるうとしておられた人間イエスを力づけるためのものでした。「み座のまわりの天使たちよりもこの人たちがえらばれ、彼らがイエスの苦難の場面について語り、天の同情の確証をもってイエスを慰めるためにやってきたのだった」(『各時代の希望』中巻195ページ)。

ペトロ、ヤコブ、ヨハネのように信仰の確証を得るこのような経験をしたら、もう二度と疑ったり、信仰の動揺はしないだろうと思われそうですが、この弟子達はそうではありませんでした。何が問題だったと思いますか。私たちにってはどうか。

木曜日

新しい御国の律法(マタ20:25~28)

1月27日

キリストの働きは終局に向かって進んでいました。彼は最後の旅路を弟子たちと共に歩いておられました。その途中で、キリストは弟子たちにはっきりと次のように言うておられました。「人の子について預言者が書いたことはみな実現する」(ルカ18:31)。「人の子は、祭司長たちや律法学者たちに引き渡される。彼らは死刑を宣告して、異邦人に引き渡す。人の子を侮辱し、鞭打ち、十字架につけるためである。そして、人の子は三日目に復活する」(マタ20:18、19)。来るべき諸事件についてのこれらの言葉を聞いて、弟子たちは預言者たちの教えに心を向けるべきでした。しかし、「12人はこれらのことが何も分からなかった。……イエスの言われたことが理解できなかつたのである」(ルカ18:34)。イエスの言葉が不明瞭あるいは不可解であったからではありません。むしろ、イエスの目的が弟子たちの目的・期待と相容れないものであったからです。弟子たちはイエスの言葉に聞き従うことを望みませんでした。キリストは彼らに、「天の国は近づいた」(マタ3:2)ことをすべての人に宣べ伝えるように教えておられましたし、彼らが天の国で高い位につき、イスラエルを裁くようになる、と約束しておられました(マタ19:27~30)。

問9 ヤコブとヨハネはこの約束に刺激されて、母サロメと共に、どんな特別な恩恵を与えてくれるようにイエスに願ひ出ましたか。イエスの返答は、御国における栄光への道と御国の統治の原則に関してどんなことを明らかにしていますか。マタ20:20~28、マコ10:35~45

この要求は利己的な野望に満ちたものでしたが、イエスは御自分の品性と使命に矛盾するような個人的な名誉を求めたヤコブとヨハネ、また彼らの母を責められませんでした。それどころか、イエスは御自分に対する彼らの愛と献身を深め、純粹なものにしようとしておられます。イエスは彼らに、十字架が冠に先立つことを理解させようとしておられます。

◆ ロシアの作家ドストエフスキーの作品に、イエスが初臨の時と同様、人となって地上に来られる物語があります。イエスは間もなく逮捕され、投獄されます。ところで、イエスが人となって直接あなたの人生に介入されるとしたら、あなたはどうかでしょうか。

『患難から栄光へ』下巻40、243～246ページ、『各時代の希望』中巻363～371ページ、同下巻118ページ、『キリスト教教育の原理』（英文）142ページ、『清められた生活』（英文）56、57ページ、『教会へのあかし』（英文）第4巻226ページを読んでください。

「カルバリーの十字架は人々の上に高く掲げられ、それに、人々の心がひきつけられ、彼らの思いが集中させられなければならない。その時すべての霊的機能は神からの直接の力に満たされる。そして全力をあげて主のための真の働きに集中するのである。働き人たちは地を照らす生きた器として、世界に光の流れを送るのである」（『思いわずらってはいけません』56、57ページ）。

イエス・キリストの生涯を瞑想するとき、驚嘆すべき事実の一つは、キリストが、ご自分の死の時を知っておられたということです。旧約聖書に精通し、それらの御言葉がご自分のことを証していることを明確に理解しておられたキリストは、ご自分が公生涯に入られてから3年半後、ニサンの月の14日の夕暮れに、「世の罪を取り除く神の小羊」として、十字架上で死ぬことをご存知でした（ダニ9：24～27、出12：1～6、詩22：16など参照）。

私たちも、やがて死ぬ、ということは知っています。しかし、その日その時はわかりません。知らないことでどれだけ助けられているか、わかりません。自分の死ぬ時が最初からわかったら、とても平常心では生きられるものではありません。

しかし、キリストはご存知でした。キリストは、いつも十字架の影を意識しておられました。それでも、心を乱すことなく、日々、神の導きに従って歩まれ、その御旨を忠実に行われました。それだけでなく、自分の十字架の死に直面する弟子たちのことを考えて、ご自分の使命に関する弟子たちの誤った考えを正し、差し迫った厳しい試練に備えるように、心を砕いておられます。そこに、弟子たちを「愛して、彼らを最後まで愛し通された」愛の神、キリストのお姿を見ることができま。

十字架は、その最高の愛の啓示でした。この愛で私たちも愛され、生かされています。私たちを愛するがゆえに、その命を私たちの罪のために、身代わりとして捧げる決意をもって、この地上を十字架に向かって、ひたすら歩き続けてくださった主に、心からの感謝と賛美をささげたいものです。

—〈寄稿メッセージ〉—



第6課

2月5日

受難週

● 暗唱聖句 ●

「イエスは言われた、『今や人の子は栄光を受けた。神もまた彼によって栄光をお受けになった』」
(ヨハネ 13:31、口語訳)

「イエスは言われた、『今や、人の子は栄光を受けた。神も人の子によって栄光をお受けになった』」
(ヨハネ 13:31、新共同訳)

今週の聖句 マルコ 11:1～11、ヨハネ 13:1～17、15:9～17

安息日午後

今週のテーマ

1月29日

ローマのある博物館に、十字架刑の場面を描いた非常に古い絵が展示されています。壁に描かれたこの風刺漫画には、ロバの頭をした男が十字架に磔はりつけにされています。別の男が十字架の前に立って、両手を広げて彼を崇拜しています。絵の下にはラテン語で、「神を礼拝するアレクサンダー」と刻まれています。

ユダヤ教徒とキリスト教徒はロバを礼拝することで非難されてきましたが（その起源は不明）、この侮辱的な絵は十字架の恥辱を理解するうえでいくらか助けになるかもしれません（もっとも、私たちは十字架を恥辱とは考えていませんが）。実際のところ、私たちは十字架を崇め、十字架を賛美し、十字架を教会に飾り、十字架を賞揚する本を書いています。しかし、犯罪人として、この上なく恥辱的で残忍な方法で処刑された男を礼拝することにどんな意味があるというのでしょうか。

もちろん、この男がだれであり、その死が世にとってどんな意味を持っていたかを理解するときに、それは大いに意味を持つものとなります。

四福音書のほぼ三分の一が、キリストの十字架と復活に至る最後の過越週を扱っています。これには、天国と最後の裁きに関するいくつかのたとえが含まれています。

今日の研究では、しばしば受難週とも呼ばれる期間、つまり十字架前の日曜日または月曜日から、復活される次の日曜日までの期間を概観します。主の初めの教えに従い、過越の小羊イエスは第1の月（初めはヘブライ語でアビブ、後にニサンと呼ばれた。早春に当たる）の14日の夕に屠られました（出12：1～6、34：18、エス3：7参照）。以下に、重要な点を概略します。

日曜日（ニサンの9日） 勝利の入城。無言の神殿訪問。ベタニアへ戻る。

月曜日（ニサンの10日） 実のならないイチジクの木を呪う。2回目の神殿の清め。神殿で病人をいやす。夕刻、ベタニアへ帰る。

火曜日（ニサンの11日） 神殿での最後の日（ギリシア人の信者と中庭で会う）。最後の公衆伝道。宗教指導者を非難する。オリーブ山に退き、そこで再臨について語る。この夜、ユダが祭司たちと裏切りの取引をする。

水曜日（ニサンの12日） 弟子たちと共に静かに退く。

木曜日（ニサンの13日） 過越祭の準備。主の晩餐。ユダの裏切り。弟子たちへのイエスの告別説教と大祭司の祈り。ゲッセマネ。逮捕。主の聖餐以降の出来事は日没とそれ以後。したがって、それはニサンの14日になる。木曜日の夜のこと。

金曜日（ニサンの14日） アンナス、カイアファ、最高法院へと連行される。ペトロの拒絶。ピラト、ヘロデの宮殿、またピラトのもとへ連行される。鞭で打たれ、有罪宣告を受け、十字架につけられる。

◆ ヨハネ15：9～17を注意深く読んでください。過越週の間、イエスは一つのことを強調しておられます。それはどんなことですか。それが時宜にかなったことであるのはなぜですか（十字架に照らして）。それは私たちに何を教えていますか。

月曜日 勝利の入城、神殿の清め(マコ11:1~11、ルカ19:28~48)

1月31日

問1 マタイ21:1~11に記されているキリストのエルサレム入城について読んでください(マコ11:7~11、ルカ19:29~40参照)。魚とパンの奇跡を行われたときとは対照的に(ヨハ6:15)、イエスがここで積極的に群衆の中に入って行っておられるのはなぜだと思いますか。

イエスはその働きにおいて終始、目立たない態度を取ってこられました。あまり大げさに忠誠心を表すようには奨励しておられません。指導者が憎しみと反感を抱いていることを知っておられたので、御自分のいやし、教え、宣教の働きが完成するような方法で働く必要がありました。

しかしながら、ここでは、それが十字架に至る道であることを知って、あえて目立つようにしておられます。さらに、群衆が押し寄せ、イエスに対する関心が高まった方が、目立たない態度を取った場合よりも、より多くの人がイエスの死と復活について知るようになるからでした。

問2 次の日、イエスは何をされましたか。その結果はどうでしたか。
マタ21:12~16

イエスがエルサレムに入城される時、群衆は次のように叫んでいます。「主の名によって来られる方、王に、祝福があるように。天には平和、いと高きところには栄光」(ルカ19:38)。次の数節にあるイエスの応答を見ると、イエスはこれらの歓呼と賛美を認めるだけでなく、それらを肯定しておられます。それから、ダビデの王、ダビデの子として、神殿を清め、それを「わたしの家」(マタ21:13)と呼び、その正当な所有者として、神殿に対して神としての権威を行使しておられます。

このように、エルサレムに入城し、神殿を清め、最後にまた神殿に戻り、そこで指導者たちから詰問されるまでの間に(マタ21:23~27)、イエスは公然と民衆・宗教指導者の前で御自分の権威を表明されました。また、イエスは憐れみ深い方法で、御自分が救い主である証拠をお示しになりました(マタ21:15,16)。問題は、彼らがこれにどう応答するかでした。

イエスは宗教指導者たちをやりこめた後で（マタ21：23～27）、御自分を拒む者たちの運命に関していくつかのたとえを語っておられます（28～46節）。大祭司、ファリサイ派の人々は、イエスが自分たちについて語られたことに気づきました。そして、皮肉なことに、彼らはイエスを支持している民衆に対立していたのです（45、46節）。

問3 次の各聖句からイエスに対する民衆のどんな態度がわかりますか。マタ26：3～5、マコ14：1、2、ルカ22：2、23：27、28、ヨハ11：48

これらの聖句によれば、多くの人々がイエスを支持していました。大祭司・ラビたちがイエスを恐れたのはそのためです。もしイエスが信奉者を持たない三流の説教者だったなら、指導者もこのような態度を取らなかったでしょう。しかし、そうでないことはヨハネ11：48を見れば明らかです。彼らは、イエスをそのままにしておけば「皆が彼を信じるようになる」と考えていました。明らかに、多くのユダヤ人がすでにイエスを信じており、放っておけば、さらに多くの人が信者になることでしょう。

学者の見解によれば、イエスに対する裁判は全く慣例に反するものでした。まず、裁判が夜中に行われている点です。ユダヤ人の伝統によれば、特に重大な犯罪にかかわる場合には、裁判を夜中に行うことはあってはならないことでした。指導者が裁判を夜中に行わねばならなかったのは、それを民衆の目から隠すためでした。

もちろん、イエスの死を扇動した群衆がいました。しかし、過越祭の時期であり、外国から多くのユダヤ人が訪れていたので、この人たちがイエスという人物とその行いについて全く知らなかったということもありえます。イエスがエルサレムに入られるとき、一部の人々が、「いったい、これはどういう人だ」と言って騒いでいます（マタ21：10、11）。これに対して群衆は、この方はイエスだ、と答えています。これらの人々がイエスを知らなかったのはなぜでしょうか。おそらく、彼らは外国から来たユダヤ人で（それゆえ、イエスのことを知らず）、指導者の言うままに、イエスの死を要求したのでしょう。しかし、ひとたびイエスに関して真実が明らかになると、多くのユダヤ人がイエスに従いました（使徒2：41、21：20、21）。

水曜日

足を洗う

2月2日

イエスと共に一日を静かな瞑想のうちに過ごした後で、弟子たちは過越祭の準備をします。御自分がまことの過越の小羊として献げられることを知っておられたイエスは、残された平和な数時間を弟子たちのために過ごしたいと望まれます。イエスの次の言葉は心を打ちます。「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた」(ルカ 22:15)。

問4 ヨハネ 13:1～17を読んでください。贖いの死を遂げる前に、キリストはどんなことをされましたか。この行為にはどんな深い意味がありましたか。それは神の品性についてどんなことを教えていますか。

十字架の恥辱と苦しみを受ける直前に、イエスは弟子たちの足を洗われます。この世界を創造された神御自身が、弟子たちの足を洗われるのです。イエスが本当はどのようなお方であるかを知るときに初めて、私たちはこのイエスの行為が何と信じられない驚くべき行為であることか、また神の品性のいかに信じ難い啓示であることか、理解し始めることができます。この行為はまた、間接的な意味で、人に仕えるよりも人から仕えられることを求める私たち自身についての啓示です。キリストの行為は弟子たちばかりでなく、尊大で、高慢で、利己的な私たちに^{けんせき}対する譴責です。

問5 足を洗うことを通して、イエスは謙遜と奉仕のほかになん神学的教訓を弟子たちに与えておられましたか。ヨハ 13:10

すでに体を洗った者は再び体を洗う必要はなく、ただ足だけ洗えばよいと言われたとき、イエスは、いわばバプテスマ後の罪について教えておられたのでした。つまり、バプテスマを受けた(体を洗った)人たちは、罪を犯すたびにバプテスマを受けなおす必要がないということです。足を洗うこと自体が、悔い改め、清め、赦しの象徴となるのです。

◆ 足を洗うことを楽しいと感じる人はあまりいません。本来、洗足式は楽しいものとなるように意図されたものではありません。なぜだと思えますか。

問6 イエスは中心的な3人の弟子たちと共にゲッセマネの園に入り、彼らに誘惑に陥らないように祈っていなさいと言われました。その後で、イエスは3度、父なる神にどんなことを嘆願しておられますか。この杯は何を意味していますか。どんな最高の原則がイエスの決心を支えましたか。マタ 26 : 36 ~ 44、マコ 14 : 32 ~ 42、ルカ 22 : 39 ~ 44

キリストが失われた罪深い人間を救う力を求めて嘆願しておられる時にも、彼に対する反逆と裏切りの渦が勢いを増していました。サタンはあらゆる悪知恵を用いてキリストを失望させようとし、ユダは暴徒を率いて救い主を捕らえようとし、弟子たちは眠っていました。

キリストの心は深く悲しみに引き裂かれていたので、ゴルゴタの釘がその体に打ち込まれる先から、彼はすでに人類の罪のために血潮を流しておられました。キリストは、御自分の無実と憐れみで満ちた甘露を私たちに飲ませるために、私たちの罪と恥で満ちた胆汁をお飲みになりました。キリストは、私たちに和解の杯を与えるために、怒りの杯を飲み干されました。

問7 ゲッセマネにおけるキリストの苦しみを耐え難いものにしたのは何でしたか。Ⅱ コリ 5 : 21 (イザ 53 : 10、ゼカ 13 : 7)

「神の御子がゲッセマネの園で、かがんで祈られたとき、その魂の苦悩のゆえに毛穴から大粒の血のような汗がしたたり落ちた。大いなる闇の恐怖が彼を覆っていた。世の罪が彼の上のにしかかっていた。彼は神の律法の違反者として人の代わりに苦しんでおられた。彼は誘惑と戦っておられた。神の聖なる光が彼の前から取り去られ、彼は闇の勢力の手に引き渡されていた。魂の苦悩のうちに、彼は冷たい土の上にひれ伏しておられた。彼は父なる神の不興を感じておられた。彼は罪深い人間の口から苦しみの杯を取り、自らそれを飲み、代わりに祝福の杯を人間に与えようとしておられた。人の上を下るべき怒りが今、キリストの上を下っていた。神秘の杯が彼の手の中で震えた」(『教会へのあかし』第2巻203ページ)。

金曜日

今週のメッセージ

2月4日

『各時代の希望』下巻173～185ページ、『教会へのあかし』（英文）200～205ページを読んでください。

「イエスは、ご自分の地上生涯において、それまでこのようなデモンストレーションをおゆるしにならなかった。イエスははっきりと結果を予見しておられた。それはイエスを十字架につけることになるのであった。しかしこのように公然とご自身をあがない主として示されることはイエスのみこころであった。イエスは墮落した世に対するご自分の使命の最後の仕上げとなる犠牲に人々の注意を引こうと望まれた。人々は過越節を守るためにエルサレムに集まってきていたが、小羊の本体であられるイエスが、自発的な行為によって、ご自身を供え物として聖別された。これにつづくすべての時代のキリスト教会は、世の罪のためのイエスの死を、深い思想と研究の主題にすることが必要であった。これに関係のあるひとつひとつの事実が、疑いの余地がないまでに証明されねばならないのであった。だからいますべての人の目をイエスに向ける必要があった。イエスの大いなる犠牲に先立ついろいろな出来事は、人々の注意を犠牲そのものにひきつけるようなものでなければならない。イエスのエルサレム入城に伴うこのようなデモンストレーションのあとで、すべての人々の目は、イエスの最後の場面への急速な進展を追うのであった」（『各時代の希望』下巻5ページ）。

ゲッセマネの園でキリストは「ひどく恐れてもだえ始め」「わたしは死ぬばかりに悲しい」（マル14:33、34）と告白しておられます。キリストはあの時、全人類の罪を背負うことが実際にどういうことであるかを経験しておられました。

罪の結果は、神と人類の永遠の隔離です。キリストは、ご自分が負われる人類の罪の重荷のゆえに、父なる神から永遠に引き離されるのではないかという恐れを感じておられました。それは、死ぬほどに悲しいことでした。永遠のはじめから、父なる神と完全な愛で結ばれ、いつも一つであられたキリスト、地上の生涯においても、常に神のご臨在を感じておられたキリストにとって（ヨハ8:16、29、16:32参照）、その父から引き離されることは、耐え難いほどの悲しみでした。神への激しい愛ゆえに、キリストは、苦しみ、もだえ、血の汗を流して祈られました。それほど苦しみ、悲しみを乗り越えて、最後には「しかし、わたしの思いではなく、みこころのままに」と祈られました。この「しかし」が、人類に希望をもたらす歴史の転換点になりました。自分を罪と滅びから救うために戦ってくださった主に、心から感謝と賛美をおさげします。

—〈寄稿メッセージ〉—



第7課

2月12日

カルバリーへの道

● 暗唱聖句 ●

「ピラトはイエスをゆるしてやりたいと思って、もう一度かれらに呼びかけた。しかし彼らは、わめきたてて『十字架につけよ、彼を十字架につけよ』と言いつづけた」 (ルカ 23 : 20、21、口語訳)

「ピラトはイエスを釈放しようと思って、改めて呼びかけた。しかし人々は、『十字架につける、十字架につける』と叫び続けた」 (ルカ 23 : 20、21、新共同訳)

今週の聖句 マタイ 26 : 57 ~ 68、ルカ 22 : 66 ~ 71、
ヨハネ 18 : 2 ~ 9、12 ~ 23

安息日午後

今週のテーマ

2月5日

チェコの作家フランツ・カフカの小説『裁判』の中に、一切明らかにされない罪状によって逮捕され、有罪とされ、処刑されていくジョゼフ・ケイという銀行員の話が出てきます。彼は度重なる不条理で不当な尋問、召喚、遅延に苦しみます。ケイは終始無実を主張しますが(罪状すらわからないのに)、最後には魔鋏に連れて行かれ、そこで処刑されます。

ジョゼフ・ケイの体験がいかにも不条理で、不当であったにしても、イエスの裁判に見られる不条理さ・不当さとは比べ物になりません。イエスは、事実について調べる意図の全くない、偏見に満ちた法廷に引き出されても(彼らの関心はイエスを殺害することだけだった)、それまでと同じく威厳と愛と同情心を失うことはありませんでした。イエスの裁判は、多分に芝居じみたものでしたが、墮落した人間の行為が無条件の愛といかに相容れないものであるかを教えています。

日曜日

逮捕

2月6日

問1 群衆にイエスを捕らえるという犯罪がどういうことであるのか悟らせるために、神はどんな機会を提供されましたか。ヨハ18:2～9

群衆がナザレのイエスを捕らえるためにやって来たとき、イエスは「わたしである」を意味する“エゴ・エイミ”という二語のギリシア語をもって応答されました。それは、イエスがユダヤ人指導者たちに「アブラハムが生まれる前から、『わたしはある』」（ヨハ8:58）と言われたときのそれと同じ言葉でした。この簡潔な言葉は、「ヤーウェ」（出3:11～14）と訳されるヘブライ語の神の御名と意味において関連があり、「ある」を意味するヘブライ語の語根から来していると思われます。したがって、ある人たちはそれは「独立者」または「自存される方」を意味すると考えています。イエスはこの言葉を用いることによって、彼らに御自分の身分についてあかししておられたのです。

イエスが「わたしである」と言われると、群衆は後ずさりし、地に倒れます。「一条の天来の光が救い主のみ顔を照らし、鳩のような形をしたものがイエスをおおった。この天来の栄光の前に、残忍な暴徒たちは一瞬間も立っていることができなかった。彼らはよろめいてうしろへさがった。祭司たち、長老たち、兵士たちは、それにユダさえも、死人のように地面に倒れた」（『各時代の希望』下巻186ページ）。

問2 ペトロの行動から、彼でさえ状況をよく理解していなかったことがどのようにわかりますか。マタ26:51、マコ14:47、ルカ22:50、ヨハ18:10

群衆がキリストの「栄光」の前に倒れるのを見たペトロは、主が弟子たちの弱々しい剣によって守ってもらう必要などないことを理解していてもよさそうなものでした。主が自分から「わたしである」と名乗り出でられること、また暴徒たちを地に倒れさせておられることから「逃げようと思えば、いつでも逃げられた」、主が進んで捕らえられようとしておられたことがわかります。これらの行動によって、イエスは御自分の聖なる品性と性質を群衆にあかししておられました。このような切迫した危機の最中にも、イエスは御自分を憎む者たちの救いのために働いておられました。

問3 ヨハネ18:12～23を読んでください。ペトロとイエスは共に質問されています。両者が質問された状況とその応答を比較してください。両者の応答から何を学ぶことができますか。

イエスとペトロの応答はきわめて対照的です。ペトロは屋外で、しかも非公式な場面で、何の身分も、何の法的権威も持たない人の前にいます。それなのに、イエスとの関係を尋ねられたとき、「違う」と答えています。対照的に、イエスは屋内で、ユダヤ国家の高官、地位と権力のある指導者の前にいます。そして、弟子たちについて尋ねられたときにも、イエスは率直に答えておられます。役人に平手で打たれたときにも、包み隠さず、正直に答えておられます。

問4 特に平手で打った役人に対するイエスの言葉に注意しながら、ヨハネ18:20～23を読んでください(23節)。イエスが不当にも役人によって打たれるというこの短い記述は、福音の原理をどのように例示していますか。イザ53:5、Ⅱコリ5:21

ペトロはうそをつき、イエスは何も悪いことをしないのに打たれています。ここに、墮落した人間と人類を救うために来られた愛の神とが対照的に描かれています。イエスの答えは、福音がどのようなものであるかを暗示しています。イエスの敵はイエスのうちに何の悪も見いだすことができません。つまり、イエスが罰せられたのはその潔白さのゆえということになります。

◆ キリストに対するこのような取り扱いの記述は、私たち自身が不当な取扱いを受けたときにどんな助けになりますか。

火曜日

夜の裁判

2月8日

問5 マタイ26:57～68には、カイアファ、律法学者、長老たちの前でイエスの裁判がどのように描かれていますか（マコ14:53～65参照）。これらの聖句から、この裁判がいかに不当で偏見に満ちたものであったかがわかりますか。

問6 イエスには、御自分を告発する者たちに答える必要がなかったのはなぜですか。マコ14:56～59

裁判が一向に進まないのを、大祭司がついに尋ねます。「生ける神に誓って我々に答えよ。お前は神の子、メシアなのか」（マタ26:63）。肯定的な答えをすれば必ず死刑になることを知っておられましたが、キリストは御自分の身分や父なる神との関係を否定するようなことはなさいませんでした。しかしながら、キリストは法廷に対して、彼らがいつの日か神としての権威を帯びて来られるキリストを見ることになる、と警告されました。

問7 イエスは大祭司の質問に何と答えられますか。マタ26:64

興味深いことに、イエスは大祭司の質問に対して、世の罪のための御自分の贖いの死や、復活や、天における真の大祭司（カイアファはその象徴となるはずであった）としての働きには言及しておられません。むしろ、疑問の余地がないくらいにはっきりと、イエスは御自分の再臨に言及しておられます。それは、イエスが逮捕され、拷問を受け、虐待され、死刑宣告を受けるような人物としてではなく、人の子として、「全能の神の右に座り、天の雲に乗って来る」ときです（マタ26:64）。キリストはこれまで、弟子たちに再臨のことを話してこられました。そして今、この重大なときにも、同様に、御自分の敵に再臨について話されます。これで彼らは、「自分たちは聞かなかった」と言うことができません。

◆ イエスは危機の中にあっても、御自分の再臨に言及することによって、すべてのクリスチャンの大いなる希望を強調しておられます。特に試練のときにあっては、再臨の約束が唯一の希望を与えてくれるのはなぜですか。

夜の裁判の後で、イエスは再び指導者たちと対決しなければなりませんでした。それはおそらく、前夜にイエスに対して下された死刑判決を正式に承認するためのものだったと思われます。

問8 福音書記者の中でも、ルカがこの朝の裁判をいちばん詳しく記録しています。彼の記録を読んでください（ルカ22：66～71）。夜の裁判と朝の裁判との間には、どんな共通点・相違点が見られますか。

夜の裁判のときよりも多くの人在那里、基本的に同じ質問をイエスにしています。イエスの応答に注意してください（ルカ22：67～69）。彼らの心、つまり彼らが真理を知ることよりも、ただイエスを有罪にしようとしていることを知っておられたので、イエスは直接的には彼らの質問に答えられません。「わたしが言っても、あなたたちは決して信じないだろう」（67節）。何を信じるといえるのでしょうか。イエスがキリストであるということです。もしイエスが、自分はキリストでない、と言ったなら、彼らも確かにイエスを信じていたでしょう。事実、彼らがイエスを裁判にかけたのは、イエスがキリストであることを信じなかったからでした（そうでなければ、イエスを裁判に付ける必要はなかったはずです）。イエスはこの裁判が茶番劇であることを見抜いておられました。彼らの関心は真理を知ることではなく、真理であるお方を無き者にすることにありました。

そこで、イエスは全員の前で再び、御自分の権力と権威に言及して、人の子が神の右に座る、と言われます。イエスが御自分のことを言っておられると考えた指導者たちは、単刀直入に、「では、お前は神の子か」と尋ねます（70節）。

イエスはここでも、直接的にはありませんが、「わたしがそうだ」という表現を用いて彼らの質問に答えておられます。彼らの反応を見れば、彼らのはっきりと、イエスが神性を主張したと理解していることがわかります。前夜と同様、イエスはここでも、御自分がだれであるかを彼らに明かしておられます。イエスが神としての働きを通してお示しになった数々の証拠を見たときに、指導者たちはイエスを信じているべきでした。悲しいことに、彼らはそうしませんでした。

木曜日

ピラトの妻の夢

2月10日

イエスは三つの宗教的「裁判」の後、ピラト、ヘロデ、それから再びピラトの前で政治的「裁判」を受けるために引き回されます。ここで注目したいのは、ピラトが自分の妻からイエスに関わらないようにと非常に強い警告を受けていることです（マタ 27：19）。彼女は夢の中で何を見たのでしょうか。

「キリストの祈りに答えて、ピラトの妻のもとに天からみ使いが訪れ、夢の中で、彼女は救い主を見、共に語ったのであった。ピラトの妻はユダヤ人ではなかったが、夢の中でイエスを見たとき、イエスの性格や使命に疑いをもたなかった。彼女はイエスが神の君であることを知った。彼女は、イエスが法廷でさばかれるのを見た。……彼女はカルバリーに十字架がたてられるのを見た。彼女は地が暗黒につつまれるのを見、『すべてが終わった』という神秘的な叫びを聞いた。さらに彼女はもう一つの光景を見た。彼女はキリストが大いなる白い雲に乗り、一方地は空間に揺れ動き、キリストを殺した者たちがその栄光の前から逃げ出すのを見た。恐怖の叫び声をあげて目をさますと、彼女は、すぐピラトにあてて警告のことばを書いた」（『各時代の希望』下巻 242、243 ページ）。

問9 彼女の見た夢を分析してください。イエスについてどんな三つのことが彼女に示されていますか（以下の聖句を参照）。

1. ロマ 5：18、Ⅱコリ 5：21 _____
2. フィリ 2：8、ヘブ 12：2 _____
3. マコ 14：62、使徒 1：11 _____

ピラトの妻はこの幻の中で、キリストの義なる性格から再臨に至るまで、いわば救いの計画を圧縮したのを見せられました。彼女が再臨に関して見たものと、キリストが裁判において指導者に語った言葉との間に見られる共通点に注目してください。

◆ イエスが混乱の中にあっても、御自分に敵対する人々を含め、すべての人を救おうとしておられたことに注目してください。このことは、罪と弱さの中にある信仰の戦いを経験している私たちにどんな希望を与えますか。

「贖い主の生涯の最終場面をたびたび瞑想することは……あなたの祝福となる。この世で、キリストと同様、私たちは様々な誘惑に囲まれているが、みなこの上なく重要な教訓を学ぶことができる。毎日、飼葉桶からカルバリーまで、キリストの生涯を振り返る瞑想のひと時を持つとよい。キリストの生涯を要点ごとにとらえ、想像力を用いて各場面、ことに地上生涯の最後の場面を生き生きと把握すべきである。このように、キリストの教えと苦難、人類の贖いのためになされた無限の犠牲を瞑想することによって、私たちは信仰を強くし、愛を奮い起こし、救い主を支えてくださった聖霊によって、より深く満たされることができる。……十字架上のキリストを瞑想するときに、人間の持つ高尚で寛容な性質が伸ばされる」(『教会へのあかし』第4巻374ページ)。

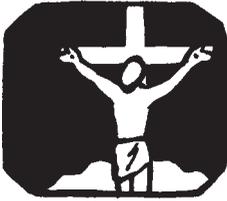
自分に裏切られたあと、十字架にかかって死んでいかれるキリストを見た時、ペトロはどんな気持ちだったでしょう。あの十字架の後、一番落ち込んでいたのは、きっとペトロだったに違いありません。だからこそ、よみがえられた主は天使を通じて、ペトロを名指しで、ガリラヤで会おうと言っておられます(マル16:7)。

自分の罪を深く自覚した者にとって、赦されることほどうれいしいことはありません。ペトロはこの赦しを経験したのです。後にペトロは、「十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました」(Iペト2:24)と言っています。ペトロはのちに、あの十字架こそが、裏切り者の自分の罪のための身代わりの死であった、ということを知ったのです。これこそ、私たちが今日もう一度確認したい、大切な真理です。

私たちは、神に対して死すべき者、滅ぶべき罪人でした。あの十字架は、本当は私がかかすべきものでした。それなのに、キリストが私たちの罪を背負って身代わりとなって、のろいの木にかかってくださいました。「すなわち、一人の方がすべての人のために死んでくださった以上、すべての人も死んだことになります」(2コリ第5:14)。キリストの死は私の死でした。「わたしはキリストと共に十字架につけられています」(ガラ2:19)。

私たちは、もうあの十字架の上で死んだのです。今のこの命は、神から与えられた新しい命、新しい人生です。キリストからいただいたこの新しい命、新しい人生を大切にしましょう。今日、生きておられるのは、あのキリストの十字架のおかげであることを深く味わい、感謝しましょう。これは、決して忘れてはならないことです。

—〈寄稿メッセージ〉—



第8課

2月19日

真昼の闇

● 暗唱聖句 ●

「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」
(マタイ 27 : 46、口語訳)

「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」
(マタイ 27 : 46、新共同訳)

今週の聖句 マタイ 27 : 42、45、マルコ 15 : 31、33、ルカ 23 : 44

安息日午後

今週のテーマ

2月12日

耳を傾ける人たちに対して、自然界は神の品性について雄弁に語りかけます。それは拡声器のように、自然界を創造されたお方についての崇高なメッセージで私たちの五感を満たしてくれます。しかし、いかに完全で、美しいと言っても、自然界の言葉はしばしば弱められ、その「静的な」性格のゆえに、意味が大いに誤解されたりする可能性があります。

対照的に、キリストの十字架は創造主についての究極的な啓示です。十字架につかれたお方が神、すなわち天と地の万物を創造された神であるという信じがたい現実を受け入れるときにのみ、私たちはこの神についての真理をいくぶん理解することができます。この真理は、どんな荘厳な日没も、珍しい植物も決して啓示することのできないものです。また、人性をとられたキリストの死がどのようなものであったのか、キリストがなぜ死を受け入れられたのかを理解するとき、私たちはこの神について教訓を学ぶことができます。それは植物や天体からは決して学ぶことのできないものです。

偽りの裁判が終わると、イエスは“ピア・ドロローサ”（苦しみの道）を通って、ゴルゴタ（頭蓋骨の場所）へ行きます。十字架につけられるためです。殺人者たちは自分たちのしていることに気づいていませんでした。イエスが、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているか知らないのです」（ルカ23：34）と祈られたのは、そのことを知っておられたからでした。しかし、彼らの無知も、裁きの日には言い訳にはならないでしょう。真理を知る機会を十分に与えられていたからです。イエスを見たことがなくても、不信仰のゆえに裁かれる人たちがいるとすれば（ヨハ3：18）、イエスを近くに見ていながらイエスを拒んだ人たちはどのような運命をたどるのでしょうか。

問1 十字架にかかっている間に、イエスは、たとえばマタイ27：42、マルコ15：31、ルカ23：35にあるようなさまざまな嘲笑をお受けになりました。単に中傷のつもりだったかもしれませんが、これらの人たちは知らないままにどのような重要な真理を語っていましたか。

イエスは他人を救っても、自分自身はお救いになりませんでした。イエスは他人と自分自身とを同時に救うことがおできになりませんでした。

イエスは世の罪のための犠牲として御自身を献げることを選ばないこともおできになりました（ヨハ10：17、18、マタ26：39、ヘブ7：27、ガラ2：20参照）。しかし、そうすれば、世は滅びていたことでしょう。御自身を献げることによってのみ、イエスは「他人」を救うことがおできになりました。これ以外に方法はありませんでした。

あざけりと憎しみのうちに語られたこれらの言葉は、各時代における最大の真理を表していました。すなわち、もしキリストが世を救うとすれば、十字架による以外にその方法がなかったということです。

◆ イエスはマタイ26：39で、できることなら、この杯を過ぎ去らせてください、と祈っておられます。しかし、それは不可能なことでした。世が救われるためにはそうするしかなかったのです。このことを念頭において、マルコ8：31、ルカ24：7、ヨハネ3：14を読んでください。

月曜日

真昼の闇

2月14日

問2 マタイ27:45、マルコ15:33、ルカ23:44を読んでください。これらはどんな出来事について記していますか。この出来事にはどんな霊的意味がありますか。

聖書においては、闇は悪の象徴です。それはまた、光であって、「闇が全くない」(Ⅰヨハ1:5) 神からの断絶の象徴です。事実、イエスは「外の暗闇」(マタ8:12、22:13) という表現を用いて、地獄について語っておられます。ある意味で、イエスは十字架において私たちのために地獄に下られたのです。つまり、イエスは地獄に下る者たちが受けねばならない罪の刑罰を受けられたのです。

問3 次の聖句を読んでください。それらは、キリストの十字架において現れた超自然的な闇の意味についてどんなことを教えていますか。イザ59:2、Ⅱコリ5:21、ガラ3:13

この闇は、神の御子が罪に対する神の義なる怒りの矢面に立たれたときに、御子を取り巻いていた霊的闇の象徴です。蓄積された世の罪がイエスの上に重くのしかかり、十字架上のイエスにおいて罰せられていたとき、光なる神の臨在はイエスから隠されていました。その結果、十字架上で起きていた出来事、つまりイエスが人類を罪のもたらす有罪宣告から解放するために受けておられた大いなる刑罰を全世界・全宇宙にはっきりと表すために、闇が全地を覆ったのでした。エレン・ホワイトは次のように記しています。「深い闇は神の御子を取り巻いていた魂の苦悩と恐怖の象徴であった」(『預言の霊』第3巻164ページ)。

◆ あなたはこのような霊的闇を体験したことがありますか。原因は何でしたか。どのようにして解決しましたか。あなたは霊的闇の中にあって苦しんでいる人に対して何と助言しますか。

「3時ごろ、イエスは大声で叫ばれた。『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』。これは、『わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか』という意味である」(マタ 27:46)。

わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか 「わたしと父とは一つである」(ヨハ10:30)、「しかし、わたしはひとりではない。父が、共にいてくださるからだ」(ヨハ 16:32)と言われたイエス。イエスのこの叫びはどういう意味だったのでしょうか。これは、ヨルダン川の岸辺で父なる神から、「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」(マタ 3:13)という宣言を受けられたイエス。「父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください」(ヨハ17:21)と祈られたイエス。「天地創造の前からわたしを愛して……」(24節)と祈られたイエスとは別人なののでしょうか。もちろん、同じイエスです。ではこの叫びの意味は何だったのでしょうか。

問4 問3の聖句(イザ 59:2、Ⅱコリ 5:21、ガラ 3:13)は、キリストの叫びの理由を理解するのにどのような助けを与えているのでしょうか。

私たちには理解できないことですが、永遠の昔から父なる神と一つであられたイエスは今、罪によって生じた神との完全な断絶を感じておられました。本来なら私たちの上を下るべき神の怒りが、イエスの上を下っていました。私たちが神の怒りを免れるためでした。

「恐ろしい闇がイエスの魂を覆ったのは、父なる神の愛と恵みが取り去られたためであった。イエスは罪人に代わって、すべての罪人が経験しなければならないこの闇の中に立っておられた。義なるお方が神の断罪と怒りを受けねばならない。しかし、それは神の復讐心によるものではなかった。なぜなら、罪なき御子が罪の刑罰を受けておられたとき、神の心は大いなる悲しみに満たされていたからである。三位一体の神がこのように引き離されることは、永遠にわたって二度とないであろう」(『SDA 聖書注解』第7巻 924 ページ、エレン・G・ホワイト注)。

水曜日

「成し遂げられた」(ヨハ19:30)

2月16日

キリストは敗北者としてではなく、罪に対する勝利者として、つまり完全な無実と美德、無限の道徳的力と愛を備えた、一点の汚れもない犠牲として死なれたのでした。「成し遂げられた」というキリストの言葉は、人間としての生涯が終了したことのみならず、その犠牲が完成したこと、その成功が保証されたことを示していました。何ものも、こうして成し遂げられた御業の完全さを無効にすることはできません。長らく預言されてきたものが今、歴史上の達成された一事実となりました。これからの、キリストの最高の務め、また全天の務めは、恩恵期間の終了まで、キリストの犠牲の功績を罪に打ちひしがれた地上の住民に適用することにあります。

御言葉によって万物を創造されたお方の口から出た「成し遂げられた」との言葉は、全宇宙に反響し、宇宙の不動の道徳的秩序と、喜びと調和に満ちた宇宙の交わりとが永遠に保証されたことを高らかに宣言しました。

問5 「成し遂げられた」というキリストの叫びは、キリストの死において神殿の垂れ幕に起こった出来事の意味についてどんな光を投げかけていますか。マタ 27:51

アベルによって献げられたものから（創4:4）、ゴルゴタの日に神殿の境内で屠^{ほふ}られたものに至るまで、すべての犠牲の動物はキリストの死を指し示していました。したがって、神殿の垂れ幕が裂けたことは、キリストの死が達成されたことを示していました。それは古いヘブライの制度が終了したことを象徴し、キリストの裂かれた体を通して神のみ前に出る新しい、生きた道が開かれたことを示していました（ヘブ10:19～21）。これからは、いかなる動物の犠牲も不要となりました（ヘブ9:26）。

いかなる動物も罪を贖うことはできませんでした。罪が世にもたらした悲惨さ、不幸、損失、失望、死。このような苦しみが一匹の山羊、あるいは何千何万の山羊の死によって贖われることはありません。神殿の垂れ幕が真っ二つに裂けたのも不思議ではありません。結局のところ、それは一つの象徴・描写に過ぎなかったのです。サラダの絵を眺めているだけでは空腹が満たされないのと同様、動物の犠牲はそれ自体では一人の魂をも救うことができませんでした。

「つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく」（Ⅱコリ5：19）。

この世界の至る所に、罪のもたらした結果を見ることができます。私たちはみな、程度の差こそあれ、罪によって生じた悲しい結果に苦しんでいます。

問6 罪はどんな点で、あなたの人生に影響を与え、悲しみをもたらしていますか（個人的に、また一般的に）。

私たちが罪の恐ろしさを本当に理解できるのは、ただ十字架においてのみです。なぜなら、十字架という究極の、信じがたい手段が、罪を贖うために必要とされたからです。ある犯罪の重大さは、その癒しに要する代償の大きさによって判断されます。5時間の社会奉仕の刑なら、その罪はさほど重大な罪ではないと考えられます。しかし、もし死刑に処せられたのであれば、それは明らかに重大な罪です。このようなわけで、神が「キリストにおいて」私たちに代わって罪の究極的な結果を負われた十字架以上に、罪の恐ろしさ・重大さを啓示しているものはありません。

問7 フィリピ2：6に関連して、ペトロⅠの2：24とコリントⅡの5：19を注意深く読んでください。それらは罪の重大さを理解する上でどんな助けになりますか。

罪が人類と神との間に生じさせた淵があまりにも深いものだったので、神は私たちが罪から救うために、また私たちが神と和解させるために、罪の刑罰を御自身に負わせる以外に方法がありませんでした。三位一体の神は神秘ですが、神が「キリストにおいて」、十字架上で、罪の刑罰を御自身に負われたことを決して忘れてはなりません。罪があまりにも重大なものだったので、私たちが罪から救うためには十字架が必要でした。世が罪のゆえに神に対して負う負債があまりにも大きかったので、神御自身のほかにこの負債を弁済することのできるお方はいませんでした。

金曜日

今週のメッセージ

2月18日

『各時代の希望』下巻257～292ページ、『初代文集』300、306、348、413ページ、『各時代の争闘』下巻41、242ページ、『セレクトッド・メッセージズ』（英文）第1巻304ページを読んでください。

「私たちの贖い主は、罪人を救うために苦難の杯を飲むことに同意されたとき、文字通り苦難の限界に至るまで、苦難を受け入れられた。……私たちのために死ぬことによって、贖い主は私たちの負債と同等額を払われた。それによって、罪責を和らげるため、あらゆる支払い請求を神から一掃された。贖い主は言われる。わたしが自分の苦難と死によって罪の代価を払うことができるのは、わたしが父なる神と一つであるゆえである。わたしの死のゆえに……神の恵みは限りない効力を発揮する」（エレン・G・ホワイト『神を知るために』69ページ）。

「神の怒りが注がれるときに罪人が感じるのと同じものを、キリストは感じられた。死のとばりのような恐ろしい絶望感が罪人の罪深い魂を覆うと、罪人は罪の罪深さを余すところなく実感する。救いは神の御子の苦難と死によって達成された。罪人が自発的に、喜んでそれを受け入れるなら、救いは彼らのものとなる。しかし、だれひとり神の律法に従うことを強制されてはいない。もし彼らが天の祝福を拒み、罪の快樂と欺瞞きまんを選ぶことによってその選択をするなら、最後には神の怒りと永遠の死という報いを受ける。彼らはイエスの臨在から永遠に切り離される。イエスの犠牲を軽蔑したからである。彼らは幸福な人生を失い、一時的な罪の楽しみのために永遠の栄光を犠牲にする」（『教会へのあかし』第2巻210ページ）。

ペトロは、「嘲笑ちやうしょうの指が自分に向けられた時、彼は臆病者おくびょうであることをばくろした。主のために活動的に戦うことはしりごみしないのに、嘲笑に負けて信仰を否定する人が多い」（『各時代の希望』下巻207ページ）。自我に支配されている罪人にとって、ばかにされたり、無視されたり、ののしられたりすることが一番苦痛であり、耐え難い試練となるのではないのでしょうか。そのことを考えるとき、神の御子キリストが、十字架上で命を捨てるまでに、繰り返し繰り返し、嘲弄ちやうろうされ、愚弄ぐろうされ、あざ笑われたこと、それでも、決して一瞬たりとも感情的にならず、黙ってその仕打ちに耐えておられることに、驚きと感動を覚えます。この主によって救われた私たちも、主の名を恥じることなく、信仰の証しをさせていただけるように、愛と勇気を祈り求めたいものです。

—〈寄稿メッセージ〉—



第9課

2月26日

「復活なされたのだ」

● 暗唱聖句 ●

「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか。そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ」

(ルカ24:5、6、口語訳)

「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なされたのだ」 (ルカ24:5、6、新共同訳)

今週の聖句 マタイ 28:9、ヨハネ 11:1～46、20:10～18、
ローマ 6:4～6、Iコリント 15:3～8

安息日午後

今週のテーマ

2月19日

その人の名はラビ・メナヒム・シュネルソンと言いました。彼が1994年に亡くなったとき、この92歳の霊的指導者こそ長く待ち望んできたメシアであったという噂が、多くのルバヴィッチ派のユダヤ教徒のうちに広まりました。彼は自らダビデ王の家系であると主張していました(彼のような偉大な人がうそをつくはずがない)。彼の肉体的な苦しみはイザヤ書53章の預言の実現であり、静脈につながれたチューブはメシアの手足が刺し貫かれるという預言の実現であると彼らは考えました。後は復活するのを待つだけです。しかし、ラビ・シュネルソンは今も静かに眠ったままです。

このラビとその死を、2000年前のもうひとりのラビとその死と比較してみてください。どちらが本物のメシアであるかは自ずと明らかです。

日曜日

前兆

2月20日

イエスは地上の働きにおいて、たとえば目の見えない人をいやし、5000人に食物を与え、水をぶどう酒に変え、重い皮膚病の人をいやし、水の上を歩き、悪霊を追い出し、障害者をいやし、嵐を静め、死者を生き返らせるなど、数多くの奇跡を行われました。ヨハネも言っているように、「その一つ一つを書くならば」世界もその書かれた書物を取めきれないでしょう（ヨハ21：25）。

問1 次の聖句はイエスのどんな奇跡について記していますか。それらはイエス御自身の復活の奇跡とどのように調和しますか（マタ11：5参照）。

マコ5：35～43 _____

ルカ7：11～17 _____

ヨハ11：1～46 _____

ここで注目すべき点は、イエスとイエスの働きには死人を生き返らせるほどの力があったということです。イエスは十字架にかかる前に何度も、御自身が死んで、その死から復活すると言っておられました（マタ12：38～40、17：22、23、20：19参照）。普通の状況においてなら、もしだれかが、自分がまもなく死んで、三日後に生き返る、などと言っても、だれも信用しないでしょう。もちろん、キリストの場合は「普通の状況」ではありませんでした。いや、それ以上のものです。彼は死人を生き返らせることによって、御自分の弟子たちに、また御自分について聞いているすべての人々に、死人を生き返らせる神の力についての否定できない証拠をお示しになったのです。それによって、人々が御自身の復活についての約束を受け入れるのを容易にされたのでした。

問2 ヨハネ11：25を読んでください。イエスのこの言葉には、どんな重要な意味がありますか。前後関係に照らして考えるとき、イエスのこの言葉が大いなる力と希望を与えてくれるのはなぜですか。

レフ・トルストイの長編小説『戦争と平和』は、1800年代初頭のナポレオン侵攻時におけるロシアの貴族社会を描いています。物語そのもの、登場人物、その生涯はみな虚構であって、トルストイが作り上げたものです。

ところで、トルストイが、この小説の登場人物がみな実在の人物であって、その行動もみな事実であると主張していたとします。そして、当局から、登場人物が実在の人物であると言うのをやめるように、やめなければ投獄し、殺す、と脅されていたならどうでしょう。頭がおかしくない限り、トルストイは言われた通りに、やめていたでしょう。自分が作り上げた、偽りの物語を宣伝するために命を捨てる人はいません。

ある意味で、これはイエスの復活を批判する人たちが直面するジレンマです。なぜ聖書記者たちは、イエスが実際には復活していないのに、復活したなどと、ありもしないことを書いたのか。そうすることで金持ちになり、有名になり、成功したというのならともかく、かえって追放、迫害、拷問、投獄、死に直面したというのに。故意に作り上げた物語のために、これほどの苦しみに遭う必要があるのでしょうか。

問3 マタイ 28:9、ルカ 24:33～49、ヨハネ 20:10～23、21:1～14、使徒言行録 1:4～9には、キリストが復活後にお現れになったことが記されています。その場で、どんなことが起こっていますか。イエスは弟子たちにどんな希望を与えておられますか。弟子たちがイエスの復活をでっち上げることに、何か意味があったと思いますか。

イエスは何度も弟子たちにお現れになっています。御自身と御自身の業に対する弟子たちの信仰を強めるためでした。事実、その通りになりました。彼らは落胆し、離散し、おびえた人間の集団から（マタ 26:56、マコ 14:50、ルカ 24:17、ヨハ 20:19）、イスラエルと世の救い主、イエスの生涯、死、復活を大胆に宣べ伝える、霊的に力強い集団に生まれ変わりました。彼らは明らかに、イエスが復活されたと信じていました。その証拠に、彼らはこの真理を宣べ伝えるために残りの生涯を捧げています。I コリ 15:3～6 参照。

火曜日

墓からの証人

2月22日

「墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた」(マタ 27:52、53)。

マタイによれば、キリストが死なれたとき、次の三つの出来事が起こっています。(1) 神殿の垂れ幕が真っ二つに裂けた(マタ 27:51)。(2) 地震が起こり、岩が裂けた(同)。(3) 墓が開いた(52節)。しかしながら、「眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った」(52節)のは、イエス御自身が週の第1日の朝早くに復活された後のことでした。

問4 聖なる者たちが生き返ったのはイエスの復活の後で、その前ではなかったのはどうしてですか。

イエスの復活の後で、聖なる者たちが復活したのはまさにふさわしいことでした。イエスの復活は彼らの(私たちの)復活の保証でした。この出来事を通して、主は世の人々(聖なる者たちを見た人々は言うまでもない)に、御自分の復活の力を信じるに足る証拠をお与えになったのでした。

マタイによる福音書の数節を除けば、聖書はこれらの聖なる者たちについて何も記していません。彼らはだれだったのでしょうか。どんな経験をした人たちだったのでしょうか。彼らを見た人々にどんな衝撃を与えたのでしょうか(ルカ 16:30、31参照)。エレン・ホワイトによれば、彼らは主のために命を捧げた殉教者でした。彼らは「永遠の命に生き返り」しました(イエスが先に生き返らせた人たちとは異なる。これらの人たちはなおも死の支配下にあった)。イエスは彼らを伴って昇天されました。「彼らは、死と陰府よみに対するキリストの勝利を記念する者として、キリストと共に昇天した。この人たちはもはやサタンのとりこではない、わたしが彼らをあがなったのだとキリストは言われた。彼らがわたしのいるところに共にいて、決して死を見たり、悲しみを経験することがないように、わたしは彼らをわたしの力の初穂として、陰府からつれ出したのだ」(『各時代の希望』下巻 317 ページ)。

使徒パウロはイエスの生涯についてほとんど語っていませんが、イエスの死と復活は彼の手紙の中で重要なテーマとなっています。パウロにとって、イエスの死と復活はクリスチャンとしての希望の基礎でした。

問5 コリント I の 15:3~8 を読んでください。パウロが「最も大切なこと」と考えていたことは何ですか。また、それが「聖書に書いてあるとおり」起こったと言っているのは、どのような意味を持つのでしょうか。(ルカ 24:25~27、使徒 17:2、3 参照)。さらに、パウロはコリント I の 15:5~7 で、どういうテーマに時間を割いていますか。

コリント I の 15:12 以下で、パウロは一つの点を強調しています。それは、私たちの復活の希望がキリストの復活にかかっているということです。私たち人間は生まれつき不死ではありません (I テモ 6:15、16)。死は無意識状態の眠りであって (ヨハ 11:11、I テサ 4:13)、別の世界に上ったり、下ったりするわけではありません。主は命の主です。したがって、死は敵です (I コリ 15:26)。私たち人間には、自分の力で死に勝つ望みはありません。もし死が征服不可能なものであるなら、私たちが一生かかって蓄えてきたものはみな、墓の中で終わります。復活がなければ、私たちの信仰は「むなし (い)」と、パウロは言っています (I コリ 15:17)。ギリシア語では、「無用」「無益」という意味です。

対照的に、キリストは死から復活し、死を征服されました。私たちは信仰によって同じ勝利にあずかることができます。キリストは私たちの罪の代価を払ってくださいました。この代価は死そのものです。この代価が払われたので、私たちは自分でそれを払う必要がありません。それどころか、キリストが復活されたように、私たちも復活し、罪によって失われイエスによって回復された永遠の命を受けます。私たちがこの世にあって経験する死は一時的な眠りです。罪がもたらす最終的な刑罰、永遠の刑罰は、すでに十字架において解決済みです。贖われた者たちは、目覚めている者も眠っている者も、キリストが成し遂げてくださった業が完成するのを待っています。私たちが永遠の命に復活するとき、それは最終的に完成します。

木曜日

二種類の復活

2月24日

問6 ヨハネ5:24、25を読んでください。イエスはここで「二種類」の永遠の命について語っておられるように思われます。それらは何ですか。どのような関係にありますか。

聖書は、信じる者たちが死ぬ前に経験することのできる「復活」について語っています。いまイエスを信じている人は死から命に移っています。復活することなしに死から命に移るとはどういう経験でしょうか。それは、イエスを信じる人々が本質的な変化を経験するということです。彼らは復活して墓から出てくるわけではありませんが、この世においてキリストを生活の中心とするという生まれ変わりの経験をします。それは、生き方が根本的に変わる経験です。それゆえに、イエスはこの経験を世の終わりに死者が生き返るという根本的な経験に結びつけておられるのです。

問7 ローマ6:4～6を読んでください。パウロがここで言っていることは、キリストがヨハネ5:24、25で言っておられることとどこが似ていますか。パウロがキリストの復活を象徴として用いているのはなぜですか。

パウロにとって、イエスの死と復活は、多才・薄幸で数奇な運命をたどりついに斬首ざんしゅされたスコットランド女王メアリーの死のような、単なる歴史的な出来事ではありませんでした。イエスの死と復活は、キリストに従う私たちがこの世の生活において経験しなければならない事柄の生きた象徴なのです。

私たちはある意味で、キリストと同じ霊的経験、つまり文字通りの死ではなく、自己に対する死、罪に対する死、肉のために生きることに對する死を経験しなければならない、とパウロは言っているのです。それだけではありません。イエスを死から生き返らせたのと同じ力が、私たちに「新しい命」、もはや罪と肉に支配されることのない命に導き入れてくれるのです。これはクリスチャンに欠かせない経験です。

◆ あなたは上記の聖句にあるような経験をしていますか。それはどのような経験ですか。それは一時的な経験ですか。それとも継続的な経験ですか。

「キリストが弟子たちと共に過ごされたこの40日間に、彼らは新しい経験を得た。敬愛する恩師が、既に起こったことに照らして聖書を説明されるのを聞きながら、彼らは主を信ずる信仰を十分に確立した。彼らは、『わたしは自分の信じてきたかたを知って』いると言えるところにまで到達した(テモテ第2・1:12)。彼らは自分たちの仕事の性質と、その範囲を認識し、彼らにゆだねられている真理を世に宣べ伝えなければならないことを知りはじめた。キリストのご生涯のさまざまな事件、キリストの死とよみがえり、こうした事件を指し示す預言、救いの計画の奥義、罪をゆるすイエスの力、彼らはこうしたすべてのことの証人となって、それを世界に伝えなければならなかった。彼らは悔い改めと救い主の力によって、平和と救いの福音を宣べ伝えなければならなかった」(『患難から栄光へ』上巻20ページ)。

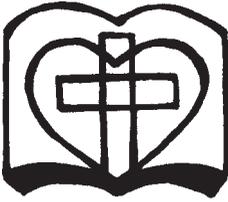
「キリストがラザロを死人の中からよみがえらせることによって行おうとしておられた奇跡は、死せるすべての義人のよみがえりを代表するものであった。キリストはみことばとみわざによって、ご自分がよみがえりの創始者であることを宣言された。まもなくご自分が十字架上で死のうとしておられたキリストは、^{よみ}陰府の征服者として死の鍵をもって立ち、永遠の生命を与える権利と権力を主張された」(『各時代の希望』中巻346ページ)

キリスト教はキリストだ、といわれます。キリストに関して、歴史上に成就した出来事が、私たちの信仰の根拠となっています。死からの復活の真理は、人間の願望から生れた、単なる思想ではありません。キリストにおいて現実が起こった歴史的事実です。ここに、私たちのゆるがない確信の根拠があります。「実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました」(Iコリ15:20)。

キリストの復活は、信仰によってキリストと一つになった者の復活の保証です。この真理は、私たちが死の恐れから解放してくれます。

Kさんは大腸がんで眠りにつかれましたが、亡くなる2日前、病院でお交わりしました。表情も穏やかで、奥様と3人で葬儀について相談しました。初めての経験です。Kさんはホスピスに入院するために家で準備しておられた時、奥様と「旅行に行くような気分だね。死んでいくような気がしないね」と話し合われたそうです。入院してからも、いつも、心が平安だ、信仰のおかげです、と喜んでおられました。死に勝利し、私たちに復活の希望を与えてくださった主を心からほめたたえます。

〈寄稿メッセージ〉



第10課

3月5日

十字架の中心

● 暗唱聖句 ●

「十字架の言^{ことば}は、滅び行く者には愚かであるが、救にあずかるわたしたちには、神の力である」 (コリント第1・1:18、口語訳)

「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です」 (コリントI・1:18、新共同訳)

今週の聖句 創世記18:22～33、ローマ3:9～20、5:12、15、18、
Ⅱコリント5:14

安息日午後

今週のテーマ

2月26日

罪を負う者、神の前の祭司また人間の代表者として、キリストは人間の肉と血を取って、人となりました。命は生きた血の流れの中にあります。その血が世の命のために献げられたのです。キリストは御自分の命を私たちのための身代金として献げることによって、完全な贖いを達成されました。彼には一点の罪もありませんでしたが、人類家族の一員としてこの世に来られました。彼は見せかけの肉体を取られたのではなく、実際に人間の性質を取り、人間の生涯を送られたのでした。

「キリスト御自身がお与えになった律法によれば、失った相続財産は近親者によって買い戻された。イエス・キリストは、人類の身代わり・保証となるために、その王位と王冠を脱ぎ、神性を人性で覆われた。それは、人間として死に、その死によって死の力を持つ者を滅ぼすためであった。キリストは神として死ぬことはできなかったが、人として来ることによって、死ぬことがおできになった。彼は死によって死を征服された。キリストの死は死の力を持つ者を葬り、キリストを自分の救い主として受け入れるすべての者のために墓の入口を開いた」(『SDA聖書注解』第7巻925、926ページ、エレン・G・ホワイト注)。

十字架はキリスト教信仰の中心ですが、初期の時代から今日に至るまで、たとえばカルバリーにおいて何が起こったのか、イエスはなぜ死なれたのか、イエスはなぜ死なねばならなかったのか、何がキリストを殺したのか、キリストの死は何を成し遂げたのか、だれがキリストの死によって恩恵を受けたのか、といった基本的な問題をめぐって、教会の中にさまざまな議論があります。パウロは、「あなたがたの間で、イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外」何も知るまいと心に決めていた、と言っています（Iコリ2:2）。しかし、後世のクリスチャンは「イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト」の意味に関して必ずしも考えが一致しているわけではありません。

問1 創世記18:22～33を読んでください。アブラハムと主との間にどんなやり取りがなされていますか。それは十字架についてのどんな重要な真理を教えていますか。

これらの聖句の意味を理解するためには、アブラハムが主に求めなかったことに目を向ける必要があります。彼は、悪い者の代わりに正しい者が救われるようには求めていません。彼は、「主よ、正しい者を見逃し、悪い者を滅ぼしてください」とは言っていません。彼はむしろ、「その50人の正しい者のために、町をお救しにはならないのですか」（創18:24）、と主に求めています。これに対して、主は、「もしソドムの町に正しい者が50人いるならば、その者たちのために、町全部を救おう」（26節）、と答えておられます。対話の初めから終わりまで、これと同じ思想が繰り返されています。45人、40人、30人、20人、10人の「ために」、主は町全体をお救しになります。

ここに、正しい者のゆえに悪い者が救われる、という十字架のテーマについての、聖書の最初の解説があります。だれかの義が、悪い者をその受けるべき刑罰から救うということです。だれかほかの人のゆえに、ほかの人たちが救われるのです。

◆ アブラハムと主との対話を見ると、主がいとも容易に条件を引き下げることに同意しておられます。このことは、神の何を教えていますか。

月曜日

人間の状態

2月28日

昨日から、正しい者のゆえに悪い者が救われるという重要なテーマについて学んでいます。しかしながら、ソドムの物語においては、町を救うに必要なだけの正しい者はいませんでした。ソドムの罪人を滅びから救うに必要と思われる10人の正しい者さえいませんでした。

ある意味で、全世界の住民はソドムとゴモラの住民に似ています。私たちの罪はソドムの住民のそれほどには非道で、粗暴ではないかもしれませんが（創19:5）。しかし、悪いことには変わりありません（世界を苦しめている恐るべき犯罪のことを考えれば、もっと悪いかもしれません）。全世界はソドムとゴモラと同じ裁きに直面しているのです。

聖書ははっきりと教えています。ソドムに生きていようと、ほかの町に生きていようと、すべての人は罪人です。すべての人が神の律法に背いたのです。どこのだれであろうと、自分自身を、ましてや他人を裁きから救う義を持ち合わせていません。

問2 ローマ5:12、15、18を読んでください。人間の罪は何が原因でしたか。

問3 人間の罪深さはどのように現されますか。ロマ3:9～20

私たちが罪深いのは、自分が犯した罪のためであり、またアダムが犯した罪のためです。私たちは生まれながらにしてアダムの子孫です。アダムが罪を犯したとき、彼の性質は墮落し、罪深いものとなりました。私たちは、あたかも自分の両親から性質を受け継ぐように、アダムから墮落した性質を受け継ぎました。アダムが罪を犯したとき、私たちは文字どおりアダムのうちにいたわけではありません（生まれる前から生存していたかのように）。私たちは単にアダムの墮落の結果を自分自身のうちに刈り取っているにすぎません。罪深い性質を受け継いだ私たちが罪を犯すのはそのためです。私たちすべての者が罪によって有罪とされるのは、アダムとのこの関係のためです。

◆ 社会的、文化的、宗教的な覆いをすべてはぎ取り、あなたの内面を見つめてください。その傾向は神に向かうものですか。自己に向かうものですか。

問4 以下の聖句はイエスの品性について何と教えていますか。

1. ヨハ8：46 _____
2. ロマ5：18 _____
3. IIコリ5：21 _____
4. Iペト2：22 _____
5. Iヨハ3：5 _____

昨日は、人類の普遍的な問題、つまり罪について学びました。しかし、聖書によれば、イエスはほかの人間とは異なり、罪を犯されませんでした。言い換えるなら、イエスは全く罪によって汚されていないただひとりの人でした。イエスは神の律法を完全に守り、つねに父の御心に従い、一度も罪を犯されませんでした。この意味において、イエスはほかの人間と一線を画していました。

日曜日の研究では、正しい者のゆえに悪い者が救われるという原則について学びました。ソドムとゴモラには、正しい者はいませんでした。今日の世界にも、正しい者はいません。しかしながら、イエスは例外です。主なる神はこの世界を救うに十分なものとしてキリストの義だけを受け入れてくださいます。神は十人の正しい者のゆえにソドムとゴモラを救うと言われました。同じように、ひとりの正しい人、つまりイエスのゆえに、神は罪深い世界を救ってくださいました。(ヨハ3：17参照)。

ローマ5：17～19には、キリストが来られたのは、アダムの罪によってもたらしたすべてのものを元の状態に戻すためであったと書かれています。アダムは罪と死、有罪宣告と反逆をもたらしましたが、キリストは義と命、義認と服従をもたらされました。このように、私たちはみなアダムによって罪人となりましたが、全く同じようにキリストによって義とされるのです。理解しがたいことですが、キリストの義は完全で、申し分のないものだったので、全世界の罪を覆うには十分でした。なぜなら、キリストの義は「神の義」(ロマ3：21)であったからです。イエス御自身が神であり、神御自身だけが墮落した世界を救うに必要な義を提供することがおできになったからです。

水曜日

神の正義

3月2日

今週はここまで、神が正しい者の義のゆえに罪人を救われること、またイエスだけが世の罪を覆う義を持っておられたことについて学んできました。しかし、もしそうであるのなら、なぜイエスは死なねばならなかったのでしょうか。イエスの義だけで十分ではなかったのでしょうか。なぜカルバリーで悲惨な死を遂げねばならなかったのでしょうか。

これらは大切な質問です。その答えはソドムとゴモラの物語の不完全さにあります。この物語が救いの科学に含まれる原則の一面しか描いていないからです。

ソドムとゴモラの町に10人の正しい者がいたと想像してください。その結果として、町は滅びを免れました。ここに神の憐れみが現されています。神は憐れみの心から、彼らを当然下るべき刑罰からお救いになりました。

同じように、キリストの義だけが全世界を罪の刑罰から救うに十分なものでした。これもまた、憐れみの行為です。

しかしながら、ここには憐れみしか描かれていません。神の品性と罪の処理に関しては、もう一つの要素を見落とすことができません。

問5 次の聖句を読んでください。それらは主についてどんなことを明らかにしていますか。ここに描かれていることを憐れみ深い神とどのように調和させたらよいですか。出34:7、ヨブ8:3、詩編89:15（口語訳89:14）、エレ23:5、使徒7:52

これらの聖句はみな、救いの計画に欠かせないもう一つの要素、すなわち神の正義に言及しています。聖書は、神が正しいお方であると教えています。これは重要な点です。もう一度、ソドムとゴモラに10人の正しい者がいて、町が守られたと考えてください。これは憐れみですが、果たして正義でしょうか。これらの町には、かなりの数の不道德者、無作法者、乱暴者がいたはずです。このような者たちが、その罪を罰せられないで、赦されてもよいのでしょうか。キリストの義は、どのような不道德者、無作法者、乱暴者であっても、世界のあらゆる罪人の罪を覆うに十分なものです。しかし、もしすべての人が神の刑罰を受けないで赦されるとすれば、それは憐れみではあっても、正義と言えるでしょうか。

神は罪深い人類を赦そうとされました。しかし、それは罪を大目に見たり罰しないままにするのでもない公正な方法でなされねばなりません。どうしたらそれが可能なのでしょうか。一つだけ方法がありました。神は罪に対する御自身の義なる怒りを、イエスにおいて御自身に注がれたのです。換言すれば、罪は罰せられる必要があるので、**神は十字架上のイエスを通して、御自身において、罪を罰せられたのです**。これが十字架の意味です。神は私たちの罪に対する刑罰を御自身に負われたのです。ここに、十字架の核心、神秘、威厳、恥辱、正義、栄光があります。

正義の神は罪を罰されます。しかし、幸いなことに、神は身代わりのイエスにおいて、すべての罪を罰されました。すべての人は、その受けるべき刑罰をイエスが十字架において受けられたお陰で、もし望むなら、だれひとりこれを受ける必要がなくなりました。

「一人の方がすべての人のために死んでくださった以上、すべての人も死んだことになります」(Ⅱコリ5:14)。パウロが言う意味はこうです。キリストは私たちの代表として死んでくださり、私たちが受けるべき死を負ってくださいました。この意味において(この意味においてのみ)、私たちはみな死んだのです。キリストの死が私たちの死と見なされます。罪のゆえに当然、死ぬべき運命にあった私たちの代表としてイエスが死んでくださったので、私たちは死なずにすんだのです。極言すれば、人間にその罪に対する刑罰を課して、永遠の死にゆだねるか、神ご自身が刑罰を負って、人間を救うか、どちらかでした。十字架は神の選択、神が罪に対するご自身の裁きを受ける決定をされたことを示しています。

問6 次の聖句は、キリストが私たちの身代わりになってしてくださったことについて、どんなことを明らかにしていますか。

イザ53:5、ロマ5:8、ガラ3:13、エフェ5:2、Ⅰテサ5:10

十字架の意味の理解はきわめて重要です。神は私たちの受けるべき罪の刑罰を自らお受けになりました。十字架に関してどのようなたとえ、象徴、比喩が用いられていようとも、この基本的な身代わりの真理から離れてはなりません。カルバリーの十字架に含まれる身代わりの側面を軽視・過小評価する神学は、救いの計画の核心を軽視・過小評価するのです。

金曜日

今週のメッセージ

3月4日

「私たちの罪はキリストの上に置かれ、キリストにおいて罰せられ、キリストによって取り除かれた。キリストの義が、肉によらず、霊によって歩く私たちに帰せられるためである。罪は私たちのためにキリストの借方に記入されたが、彼は完全に罪のないままであった」(エレン・G・ホワイト『サインズ・オブ・ザ・タイムズ』1895年5月30日)。

「キリストは完全な憎しみをもって罪を憎まれたが、全世界の罪を御自分の魂に集められた。罪がなかったが、罪ある者の刑罰を負われた。無実であったが、違反者の身代わりとなって御自身を献げられた。すべての罪の責任が世の贖い主の聖なる魂に重くのしかかった。アダムの子・娘一人ひとりの悪しき思い、悪しき言葉、悪しき行いがキリストに懲罰を要求した。キリストが人間の身代わりとなられたからである。罪の責任はキリストになかったが、彼の魂は人の不義によって裂かれ、砕かれた。全く罪を知らないお方が私たちのために罪となられた。私たちがキリストによって神の義を得るためであった」(『セレクトッド・メッセージズ』第1巻322ページ)。

出エジプト記12章の、最初の過ぎ越しの記事は、私に、いつも救いについての大切な真理を思い起こさせてくれます。イスラエルの民が出エジプトする時、エジプトには、すべてのういごが死ぬ、という災いがくだらうとしていました。主は民に、この裁きから免れる方法を示されます。それは、家族ごとに、傷のない、1歳の雄の小羊、またはやぎをほふり、その血を取って、家の入り口の二つの柱と鴨居に塗るように、ということでした。「これが主の過越である。その夜、わたしはエジプトの国を巡り……裁きを行う。わたしは主である。あなたたちのいる家に塗った血は、あなたたちのしるしとなる。血を見たならば、わたしはあなたたちを過ぎ越す」(出12:11～13)。

神は家の中の人を見るのではなく、血を見て過ぎ越す、といわれています。これは、私たちの救いの根拠がキリストの十字架の流された血にある、自分たちのうちには全くないことを、いつも私に思い起こさせてくれます。民が柱と鴨居に血を塗る行為は、神の御言葉を信じて従う信仰のしるしです。私が神を信じてその御言葉に寄り頼む限り、私には、裁きについて何も心配する必要がないということです。

さらに、この出来事は、神が民を救うために、小羊、すなわちイエス・キリストを犠牲にされたことを教えてくれます。神は人類の罪に対する裁きをご自身の御子に向けることによって、救ってくれました。感謝です。

—〈寄稿メッセージ〉—



第11課

3月12日

十字架と義認

● 暗唱聖句 ●

「わたしたちは、こう思う。人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるのである」 (ローマ3:28、口語訳)

「なぜなら、わたしたちは、人が義とされるのは律法の行いによるのではなく、信仰によると考えるからです」(ローマ3:28、新共同訳)

今週の聖句 ローマ3:20、28、4:13、5:14~18、6:23、8:33、34、9:31、32、Ⅱコリント9:15、ガラテヤ2:16、3:8~11、エフェソ2:7~9

安息日午後

今週のテーマ

3月5日

パウロは次のように言っています。「イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです」(ロマ4:25)。

上記の聖句にある「義とされる」という主題ほど、クリスチャンの間で論争になっている主題はそう多くはありません。初代教会においてこの問題と取り組んだパウロの時代から、義認の問題をめぐって教皇制と闘ったマルティーン・ルター時代、そして今日のセブンスデー・アドベンチスト(ほかのクリスチャンは言うに及ばず)まで、義認の問題はなお議論と論争的となっています。

義認は非常に重要なテーマです。私たちは主の前に、またお互いに謙虚な心をもってこの問題と取り組む必要があります。ひざまずき、心を開いて、聖霊の導きを求める必要があります。

このテーマについて学ぶには、丸一年あっても足りないくらいです。今週は、十字架と密接な関係にある深遠な義認の教えについて考えます。

日曜日

賜物

3月6日

先週は十字架において、神が罪の刑罰を負われたことを学びました。神がご自身に忠実であるためには、罪は罰せられねばなりません。これが神の正義です。しかし、憐れみ深くあるため、神は御子において罪の刑罰を負われました。神は正義の要求を満たすと同時に、受ける資格のない者たちに憐れみと赦しを与えられたのでした(ロマ3:26)。これは十字架の基礎であって、私たちはそれに基づいて罪を赦され、罪から清められ、最終的に新天地に入ります。

このことを念頭において、なぜ救いが無償でなければならないのか考えてみてください。もし救いが私たちにできる何かを基礎としているのであれば、神の御子が人間の肉体をとり、人間として神に完全に従った生活を送り、十字架につき、そこで罪に対する神の怒りを受け、世のあらゆる罪を一身に負い、私たちのために罪とされ、私たちに代わって裁かれ、有罪とされ、全世界の身代わりとして死なれたことはすべて、なお不十分であったこととなります。キリストの生、死、復活が成し遂げなかったことを完成するために、私たち罪人に加えることのできるものが何かあったのでしょうか。絶対にそのようなことはありません！自分で救いを獲得すると考えること自体、神が成し遂げてくださった御業を薄めてしまうものです。

問1 次の各聖句は救いについて何と述べていますか。ロマ5:14～18、6:23、Ⅱコリ9:15、エフェ2:7～9

「すべての人は次のように言うことができる。『イエスは完全な服従によって、律法の要求を満たしてくださった。私の唯一の希望は私の身代わりであり保証であるイエスをながめることにある。このお方は私に代わって律法を完全に守られた。彼の功績を信じることによって、私は律法の責めから解放される。彼は御自分の義をもって私を覆ってくださる。彼の義は律法のすべての要求にこたえるものである。私は永遠の義をもたらずお方であって完全である。イエスは人間の手によって織られたものではない、汚れのない衣を着せて、私を神に紹介してくださる。すべてはキリストのものである。すべての栄光、名誉、威光は世の罪を取り除く神の小羊に帰せられる』(『セレクトッド・メッセージズ』第1巻396ページ)。

上記のエレン・ホワイトの言葉を、あなた自身の言葉で書き直してください。

「わたしの僕は、多くの人が正しい者とされるために 彼らの罪を自ら負った」(イザ53:11)。

問2 上の聖句を読んでください。正しい僕はどのようにして多くの人を正しい者としますか。その答えはこれまで学んだこととどのように調和しますか。

「正しい者とする」(義とする)と訳されている語は“ツァーダク”(ヘブライ語)と“ディカイオオー”(ギリシア語)です。これらは法律用語であって、裁判官が法廷で下す判決を背景にして理解すべきものです。もし裁判官が被告に有利な判決を下すなら、被告は「正しい者」とされ、不利な判決を下すなら、被告は有罪とされます。したがって、義認は法的な宣言です。裁判官によって無罪の宣言を受けるとき、人は正しい者とされます。

問3 次の聖句を読み、無罪とされることと有罪とされることの違いについて考えてください。このことは義認の意味を理解する上でどんな助けになりますか。申25:1、箴17:15、マタ12:37、ロマ5:16、8:33、34(ヨハ3:17参照)

いずれの場合も、選択肢は二つしかありません。中間、中道、妥協はありません。正しい者とされる、つまり無罪とされるか、有罪とされるかのどちらかです。その性質上、義認(有罪も)の思想には、程度の差というものはありません。つまり、部分的に無罪、部分的に有罪ということはありません。判決が覆されて、立場が逆転することはあっても、最終的には無罪か有罪かのどちらかです。

◆ 「従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません」(ロマ8:1)。今日の研究に照らして考えるとき、この聖句はあなたにとってどんな意味を持ちますか。

火曜日

義と見なされる

3月8日

ここまで、十字架に目を向けることによって、神御自身がイエスにおいて私たちの罪のために刑罰をお受けになったことを学びました。イエスが刑罰を受けてくださったので、私たちは刑罰を受ける必要がありません。イエスが私たちの受けるべき報いを受けてくださったので、私たちは当然受けるべき報いを受けなくてもよくなりました。

しかし、私たちの救いはそれ以上のものです。幸いなことに、私たちは神の前に義とされるのです。それは私たちの善い行いによるものではなく、イエスの義によるものです。イエスだけが罪のない人生を送られました。その完全な人生が私たち自身のものと見なされるのです。言い換えるなら、イエスは私たちの罪を負い、その上、私たちの汚れた衣を脱がせ、御自身の完全な義の衣を着る機会を与えてくださるのです（マタ22：1～14）。

問4 ローマ4：1～8を注意深く読み、以下の質問に教えてください。

- (1) パウロは初めの5節で何と言っていますか。もし義認が行いによるものであれば、もはや恵みによるものなくなるのはなぜですか。行いと恵みの両方でないのはなぜですか。
- (2) アブラハムはどのようにして義とされましたか。「それが、彼の義と認められた」とはどんな意味ですか。
- (3) パウロは6～8節で詩編の言葉をどのように引用していますか。「行いによらずに神から義と認められた」人について、何と書かれていますか。罪はどのようにして赦され、覆われますか。

ここで言われていることは、もしアブラハムのような正しく忠実な人間の行いでも救われるためには不十分であるのなら、私たちの場合はなおさらであるということです。パウロが言いたかったのは、ユダヤ人の間で偉大な神の人と見なされていたアブラハムでさえ、神の前に義とされるためには、神から義と「認められる」、義と見なされる必要があったということです。

◆ 聖書全体を通じて、アブラハムは忠実な神の人として敬われています（創18：19、26：5）。それでも、彼の行いは神の前にひとり立つには不十分なものでした。このことはあなた自身について、またあなたが神によって受け入れられる唯一の方法について、どんなことを教えていますか。

アブラハムが、いかに敬虔で忠実であったとしても、神の前に義とされるほどには敬虔で忠実ではありませんでした。彼が救われるためには、自分自身の行い、あるいは自らの義以外の何かが必要でした。ここに、イエスが必要となります。イエスは私たちの身代わりとして死に、私たちの罪のために刑罰を受けてくださっただけではありません。主はすべて求める者に、自らの罪深い記録に代わって、イエスの完全な義を与えてくださいます。これが救いの計画の素晴らしい定めです。私たちの罪が赦されるだけでなく、イエスの義が私たち自身のものと認められるのです。

問5 ローマ3:25、26を読んでください。だれの義が罪を赦しますか。だれの義が私たちを義としますか。

パウロはローマ3:21～26で、キリストの義は神御自身の義であって、罪人が神の前に義とされるのはこの義によってである、と述べています。人がいくら律法を守ろうとしても、それによって救われるわけではありません。われわれ罪人の服従のもたらす義は決して神御自身の義に到達するものではないからです。

問6 ローマ10:1～3とガラテヤ2:21を読んでください。律法に対する服従が決して義をもたらしることがないのはなぜですか。

「律法は義を要求し、罪人は義を律法に負っている。しかし、彼は義に到達することができない。罪人が義に到達するのはただ信仰によってである。彼は信仰によってキリストの功績を神に捧げ、主は御子の従順を罪人のものと見なしてくださる。キリストの義は人間の失敗の代わりに受け入れられる。神は悔い改めて信じる魂を受け入れ、赦し、義とし、彼をあたかも義であるかのように扱い、御子を愛するように愛してくださる。信仰が義と見なされるのはこのようにしてである」(『セレクトッド・メッセージズ』第1巻367ページ)。

◆ 私たちは自分自身の力で服従と義に到達しようとしていないでしょうか。律法を守ることによって救いを得ようとしても無益です。あなたは、キリストの功績だけが救いの基礎であるという大いなる真理について学ばれた経験はありませんか。

木曜日

信仰による義認

3月10日

これまで学んできたことは、私たちがみな罪人であって、義とされるに必要な義に到達することができない、ということです。しかし、イエスはこの義を持っておられます。福音の素晴らしい定めによって、この義は信仰によってそれを自分のものとするすべての人に与えられます。

問7 ローマ3:20、28、4:13、9:31、32、ガラテヤ2:16、3:8～11を読んでください。パウロは律法と信仰をどのように対比していますか。彼は何を強調していますか。救いが信仰によるのはなぜですか。

これらの聖句はしばしば、クリスチャンがもはや律法を守る必要がないと教えているかのように考えられてきました(来週の研究参照)。しかし、それはパウロの論点ではありません。ここで論じられているのは服従ではなく、救いです。それは、律法が罪深い人間のうちに生み出すことのできないものです。事実、人間が死に直面しているのは律法を犯したからです。イエスが来て、律法を完全に守り、私たちの記録を御自身の記録と取り替えてくださるのは、私たちをこの死から救うためでした。墮落した人類にとって、解決は律法にあるのではなく、イエスにあるのです。

問8 上記(質問7)の聖句をもう一度読んでください。信仰による救いは新約聖書だけで教えられていることですか。

アダム以降、(イエスを除いて)すべての人は律法による有罪宣告のもとにあります。すべての人が律法に背いたからです。したがって、救いはいつでも信仰によらねばなりません。旧約時代でさえ、だれひとり律法によっては救われなかったからです。それどころか、律法そのものが罪人を有罪とするのです。律法に救いを求めることは、いわばガソリンで火を消すようなものです。

しかしながら、救いをイエスとイエスの御業に集中させることによって、主は関心の中心を問題の元凶である私たち自身から、唯一の解決策であるイエスに移されました。私たちが自分自身を救うには全く無力であることを理解するとき、自分以外のだれか、自分よりも偉大で、清く、力のあるだれかに信頼するようになります。言うまでもなく、それは「我らの義なる主」(エレ23:6、英語欽定訳)です。

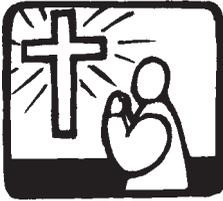
『信仰と行い』（英文）19～30ページを読んでください。

「さらに、キリストは私たちのために罪とられた。それは、私たちが『その方によって神の義を得る』ためであった。言い換えるなら、私たちの罪が罪のないキリストに帰せられたのである。私たち罪人がキリストと一つに結ばれることによって、無償の賜物として神の前に義とされる資格を得るためであった。後世のキリストの弟子たちは罪なきキリストと罪人との、この入れ替わりについて瞑想し、そのことに驚嘆した。その最初の実例が2世紀の『ディオグネートスの手紙』9章に見られる。『ああ、何という素晴らしい入れ替わり、不思議な営み、あらゆる予想を越えた恵みであることか！ 多くの者の悪がひとりの義なる方のうちに隠され、ひとりの方の義が多くの罪人の不義を義とするとは』。ルターも自分の罪で思い悩むひとりの修道士に次のように書き送っている。『キリスト、しかも十字架につけられたキリストを瞑想しなさい。キリストを賛美し、次のように言いなさい。「主イエスよ、あなたは私の義、私はあなたの罪です。あなたは私のものを負い、あなたのものを私に負わせてくださいました。私が本来の私ではないものとなるために、あなたは本来のあなたではないものとなりました』」（ジョン・R・W・ストット『キリストの十字架』200ページ）。

私たちの人生には、思い出したくない辛い経験、悲しい経験、どんなに後悔しても取り返しのつかない失敗や罪というものがあります。そのような過去に縛られて、今も過去を引きずって生きている人が、世間にはどれだけたくさんおられることでしょう。自分では過去をどうすることもできませんが、幸いにも、キリストがあのかの十字架の上で、罪にまみれた私たちの全存在の身代わりとなって死んでくださったのです。罪の代価が支払われました。キリストの死によって私たちの罪は赦され、もはや、二度と責められることも、断罪されることもありません。

キリストを信じる者には、新しい人生を生きる力が与えられます。「だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。」（Ⅱコリ5:17、口語訳）。十字架のゆえに、私たちは一切の罪を赦され、義とされていることを信じ、キリストと共に新しく生きる幸いにあずかせていただいていることを覚えたいと思います。

—〈寄稿メッセージ〉—



第12課

3月19日

十字架と聖化

● 暗唱聖句 ●

「神のみこころは、あなたがたが清くなることである」

(テサロニケ第Ⅰ・4:3、口語訳)

「実に、神の御心は、あなたがたが聖なる者となることです」

(テサロニケⅠ・4:3、新共同訳)

今週の聖句

ローマ6:1～16、Ⅰコリント6:11、ガラテヤ5:16～25、
コロサイ3:1～4

安息日午後

今週のテーマ

3月12日

「当然キリストが受けられるべきとり扱いをわれわれが受けられるように、キリストはわれわれが当然受けるべきとり扱いを受けられた。われわれのものではなかったキリストの義によってわれわれが義とされるように、キリストはご自分のものではなかったわれわれの罪の宣告を受けられた。キリストのものであるいのちをわれわれが受けられるように、キリストはわれわれのものである死を受けられた」(『各時代の希望』上巻11ページ)。

何年前か、エレン・ホワイトのこの有名な言葉を読んだ人がうれしさと感謝のあまり次のように叫んだそうです。「キリストの義によって受け入れられているのだから、これからは好きなことをしてもいいのだ。福音って、思っていた以上に素晴らしいものだ!」。

失礼。間違えました。この人は実際には次のように言ったのでした。

「ああ、イエスは何という犠牲を払われたことか。私はそのイエスの義によって受け入れられているのだとすれば、罪とは何と憎むべきものだろう。主よ、私はあなたを心から愛します。私を造り変え、清め、あなたに似る者としてください!」。

今週は、十字架を別の観点から学びます。十字架がそれを受け入れる者たちにとってどのような力を持つかを考えます。

先週は、信仰による義認について学びました。この福音は、イエスの完全な生涯、イエスの完全な義が、あたかも私たち自身のものであるかのように、つまり実際には程遠いのに、私たち自身がイエスの罪なき生涯を送ったかのように見なされるというものです。私たちのためのこの義の宣言は行いによるのではなく、信仰によるものです。信じるときに、キリストの義が神の前に私たち自身のものとなります。自分が完全に無力な者であることを認めて、十字架のもとに来て、自分のものではないものを求めるとき、私たちはそれを与えられます。私たちにその価値があるからではありません。むしろ、神が恵みの神であって、キリストの死を通して、私たちが自力では絶対に得ることのできないものを与えてくださるからです。私たちがいかに忠実に、熱心に、律法と律法の本質に従おうとしても、です。

しかし、救いの福音は義の宣言をもって終わるものではありません。神は罪人に義を宣言して、それで良しとされるものではありません。むしろ、この義の宣言は始まりに過ぎません。義とされた人に、ほかの何かが起こります。これが聖化です。聖化は福音と切り離すことのできないものです。

問1 次の聖句を読み、内容を要約してください。ロマ6:1～16、Iコリ6:11、ガラ5:16～25

信仰によって義とされている人たちは、キリストにある新しい生活、従順と聖化の生活を送ります。聖化の伴わない、信仰による義認は偽りの義認、偽りの福音です。それは安価な恵み、つまり神が罪人を義とするのではなく、罪人が罪を義とすることにほかなりません。そのような福音はだれひとり救いません。

◆ Aさんは熱心にあらゆる力を用いて救いに必要な義を追い求めています。しかし救いの確信がないので、つねに服従の生活を送るように努力しています。一方、Bさんは、キリストによってすでに救われている、キリストの義を与えられているという確信をもって、愛と感謝の心から従順な生活を送っています。どちらが理想的な信仰生活だと思えますか。

月曜日

聖別される

3月14日

「この御心に基づいて、ただ一度イエス・キリストの体が献げられたことにより、わたしたちは聖なる者とされたのです」(ヘブ10:10)。

ヘブライ語では、しばしば「聖別する」(カドーシ、またはハコーデーシ)と訳される言葉は、旧約聖書の中で、いろいろな形をとって800回以上出てきます。ギリシア語では、しばしば「聖別する」「聖なる」「聖なる者」と訳される“ハギアゾー”または“ハギオス”は、新約聖書の中で約240回出てきます。どちらの場合も、これらの言葉は「聖別する」のほかに「聖」「聖とする」「聖なる」とも訳されています。このように、原語からも、聖別と聖化が密接な関係にあることがわかります。

ところで、聖であることのヘブライ語の基本的な意味は「聖なる目的のために取り分ける」、あるいは「罪から神のもとへ取り分ける」です。このように、聖とされた者は神と神への奉仕のために分けられています。

問2 以上のことを念頭において、レビ記19:2、20:7、26を読んでください。これらの聖句は聖化の意味を理解する上でどんな助けになりますか。

興味深いことに、聖書においては、聖別される、あるいは聖とされるのは人間だけではありません。神が御自身の臨在を現される場所は「聖なる土地」です(出3:5)。安息日が聖なのは神によって分けられたからです(出20:8~11)。聖所が「聖なる所」とされるのは、それが神によって神の目的のために分けられたからです(出26:33)。

ここで注意したいのは、これらのものはどれひとつ、それ自身の内にあるもののゆえに聖とされ、あるいは聖別されているわけではないということです。週の第7日も、もし主によって聖とされていなかったなら、ほかの日と変わりありません。聖化や聖別は聖なる神によって与えられるもの、神御自身が人や物に対してなされるものです。古代イスラエルの場合は、神によって分けられ、奴隷の身分と周囲の異教民族の影響から召し出されたのでした。神の働き、つまり世にまことの神を宣べ伝える働きをするためです(出19:6)。

◆ 教会はどんな意味で「聖なる者」とされていますか(Iコリ1:2参照)。あなた自身は神の聖なる目的のためにどのように「聖別」されていますか。この思想を実際、日常的な言葉・経験によって理解するためにはどうしたらよいですか。

問3 コリントⅠの1:2で、パウロは教会を、「イエス・キリストによって聖なる者とされた人々」と呼んでいます。「聖なる者とされた」というギリシア語の時制は、過去において完了した行為の結果が現在も継続していることを表しています。しかし、コリントの教会には、さまざまな倫理的、神学的問題との闘いがありました(Ⅰコリ5、6章参照)。それでも、この教会が「聖なる者とされた」と言われるのはどういう意味ですか。

聖書においては、部分的な聖化というものはありません。私たちは生まれ変わった瞬間から全くキリストのものであり、この状態は信仰によってキリストにつながっている限り続きます。聖化はいつでも、神によって完全に所有されている経験を表します。この所有は回心において完成し、一生を通して続きます。

問4 「きよめは……一生の働きである」という言葉をどのように理解すべきですか(『患難から栄光へ』下巻 263 ページ)。

聖化の思想には、さまざまな側面があります。関係的な意味、つまり神によって分けられているという意味においては、働きは完成しています。私たちは神のものであって、神によって聖とされています。十字架上のキリストの御業のゆえに、主は私たちを御自身のものとして要求する権利を持っておられます。

しかし、道徳的な意味、つまり恵みにおいて成長するという意味においては、私たちはなお聖化の過程にあります。次の二つの聖句、つまり「真理によって、彼らを聖なる者としてください。あなたの御言葉は真理です」(ヨハ17:17)と「平和の神御自身が、あなたがたを全く聖なる者としてくださいますように」(Ⅰテサ5:23)においては、「聖なる者とする」という動詞が現在形で現れます。これは、私たちが道徳的、実際的な意味においてなおキリストの聖にあずかる継続的な過程にあることを意味しています。信仰によって、また神への全的信頼の中で、私たちは内に働く神の力によって造り変えられ、清められ、罪を取り除かれます。キリストの品性が私たちのうちに形成されるためです。

◆ 今日の研究に関連して、ガラテヤ4:19を読んでください。この聖句はあなたに何を語りかけていますか。

水曜日 「あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されている」 3月16日

問5 コロサイ3:1～4を読み、信仰生活について述べていることを要約してください。

これらの美しい聖句の中に、キリストにある私たちの新しい命の关系的な側面がはっきりと描写されています。私たちはキリストと共に復活しました。初めにキリストと共に死んだからです。つまり、回心と同時に、私たちは古い自己に死に、イエスにある新しい命に生きるのです。それは、私たちが信仰によって、聖霊の力を通して、自分自身の肉体と心、言葉と行いにおいてキリストの品性を現す生き方です。「このキリストは、わたしたちにとって神の知恵となり、義と聖と贖いとなられたのです」(Iコリ1:30)。

問6 これらの聖句(コロ3:1～4)のどこに、再臨の希望が語られていますか。それはこれらの聖句の基本的なテーマとどんな関係にありますか。再臨の希望がここで語られているのはなぜですか。

先週は、帰せられる義、つまり私たちのものと見なされる義について学びました。しかし、これらの聖句はむしろ、与えられる義について語っています。それはイエスの義が私たちのうちに現されることです。ここで語られているのは、規則や律法に対する強制的な服従ではなく、神ご自身の品性を受けるために古い自己に死ぬ経験です。私たちは墮落した存在です。この墮落には、罪のゆえに神から断罪されること以上のことが含まれていました。私たちの墮落は人類の道徳的、肉体的、霊的墮落を含んでいました。キリストは死に、復活し、天で仕えておられます。私たちが墮落以前の状態に回復するためです。人間のうちに神のかたちを回復する働きが始まりである聖化は、この過程の一部です。

◆ 上記の聖句にある「上にあるもの」を求めるとはどんな意味ですか。どうしたらそのようにできますか。私たちが読むもの、見るもの、考えること、話すことはこの勧告に従う上でどんな影響を与えますか。

私たちが神を愛するのは、十字架によって与えられた救いのゆえです。その結果として、私たちは信仰と従順によって主に従うのです。聖霊の力によって従うとき、キリストにある新しい生活が始まります（Ⅱコリ5:17）。

しかし、もし私たちが本当に神に従い、聖霊に従って歩んでいるとすれば、それはどのようにしてわかるのでしょうか。私たちは、信仰によって義とされているゆえに神を愛し、神に従うのですが（マタ7:24、ロマ1:5、16:26、ガラ3:1、ヘブ5:9、Ⅰペト4:17）、そうであるなら、神が私たちに何を期待しておられるのかを知る必要があります。

問7 次の聖句はクリスチャンにどんなことを教えていますか。ヨハ8:11、34、ガラ2:17、ロマ6:13、Ⅰヨハ2:1、3:8、ヘブ3:13、12:4

もし罪を定義する律法がなければ、クリスチャンに対するこれらの勧告にどんな意味があるのでしょうか（ロマ7:7、Ⅰヨハ3:4）。罪が存在することは自動的に、律法が存在することを意味します。律法がなければ、罪もありません。法律がなければ、犯罪もないのと同じことです。もし新約聖書が私たちに罪を離れるように要求し、その一方で律法を軽視・無効にするようなことがあれば、それは国家が国民に自動車盗を犯すように要求し、その一方で自動車泥棒を禁じる法律を軽視・無効にしているのと同じです。

神の律法は霊的なものであって（ロマ7:14）、霊的な存在者、つまり聖霊に促されて主に従う存在者のために定められています。律法は人を救うためにあるのではなく、むしろ人のために安全な境界線を定めるため、神への愛を生活の中に現す方法を教えるためにあります。だれでも、神を愛していると、言葉で言うことができます。事実、「聖霊に導かれている」と言いながら、奇妙、かつ有害な方法でこの「愛」を表現しようとする人たちがいます。しかし、聖書ははっきりと、私たちがこの愛をどのように表すべきかを教えています。「神を愛するとは、神の掟を守ることです。神の掟は難しいものではありません」（Ⅰヨハ5:3）。聖霊は、律法に反するような方法ではなく、「律法の要求が満たされる」ような方法で私たちを導こうとしておられます。「それは、肉ではなく霊に従って歩むわたしたちの内に、律法の要求が満たされるためでした」（ロマ8:4）。

◆ 神が私たちに御自分の律法を守るように望まれるのはなぜだと思いますか。神の愛は律法を通してどのように現されますか。

金曜日

今週のメッセージ

3月18日

『患難から栄光へ』上巻 333～347 ページ、『信仰と行い』（英文）29～32 ページを読んでください。

「キリストから力を得るには自分の必要を認識しなければならない。自分自身をほんとうに知らなければならない。キリストは自分が罪びとであると知っている者でなければ救うことはできない。自分が全く無力であることを知り、自己信頼の念を放棄するときに初めて神の力にすがれるのである。

この自己放棄はクリスチャンの生涯の最初にだけするものではなく、天国に向かって一步一步進むたびに、新しくすべきことがらである。わたしたちのなしうる良いわざはすべて自分以外の力によるものである。だから、絶えず心から神を求め、神の前につねに熱心に罪を告白し、謙そんにならなければならない。危険がわたしたちを取り囲むときも、自己の弱さを感じ、信仰の手をのべて、力ある主の手にすがるときに初めて安全なのである」（『ミニストリー・オブ・ヒーリング』438 ページ）。

「多くの者にとって、聖化は独善でしかない。それにもかかわらず、これらの者たちは大胆にもイエスを自分の救い主、清め主と呼んでいる。何という思い違いであろうか。神の御子は父なる神の律法を犯す者たちを清められるであろうか。キリストはこの律法を高め、光栄あるものとするために来られたのである」（『信仰と行い』29 ページ）。

中国で宣教していたミラー博士が、ある日、軽自動車に乗って町を走っていますと、狭い路地に倒れていたみすぼらしい老婆に出くわしました。博士はすぐに自分の車に乗せて、SDAの病院へ運び、治療に最善を尽くし、手厚く看護しました。幸い彼女は元気になりました。

この老婆は、実は上海に住む大金持ちでした。自分の身を守るために、わざとみすぼらしい姿をしていたのです。彼女はミラー博士に感謝し、多額の献金をしました。博士はそんなことは何も知らず、ただ倒れている病人として放っておけなかったのです。博士にとっては、どの魂も大切な魂だったのです。キリストの目には、どのような魂も尊く映りましたが、博士を動かしていたのも、このキリストの愛でした。

私たちも、信仰によってこの愛をいただいているのですから、「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」（イザ43:4、新改訳）の御言葉を口ずさみながら、人のために祝福となる生き方を祈り求めています。

〈寄稿メッセージ〉



十字架と大争闘

● 暗唱聖句 ●

「今はこの世がさばかれる時である。今こそこの世の君は追い出されるであろう。そして、わたしがこの地から上げられる時には、すべての人をわたしのところに引きよせるであろう」（ヨハネ 12：31、32、口語訳）

「今こそ、この世が裁かれる時。今、この世の支配者が追放される。わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう」（ヨハネ 12：31、32、新共同訳）

今週の聖句 ヨブ 1、2、42 章、イザヤ 53：4、マタイ 4：1、ヨハネ 12：31～33、I ペトロ 5：8、9、黙示録 5：11～14、12：7～19

安息日午後

今週のテーマ

3月19日

十字架は人類の救いに不可欠なものです。しかし、十字架の意味を人類だけに限定してしまうなら、十字架の理解は非常に限られたものになります。十字架とキリストの死は、大争闘との関連においてのみ十分に理解することができます。大争闘は、宇宙における神の品性にかかわる論争をめぐって繰り広げられています。これがなかったら、主はサタンの反逆後、直ちに彼を滅ぼされたでしょう。人類が経験した罪、救い、神の律法、神の愛などの問題は、人類世界を超えています。それで主は人類だけでなく、墮落しなかった諸世界に対しても、この宇宙的なドラマの争点を明らかにしようとされました。そのようにして、主はサタンに御自分の品性を明らかにし、同時に、墮落しなかった諸世界に対しても、いまだかつて見たことのない方法で、創造主が実際にはどのようなお方であるのかを啓示されたのでした。

キリストの十字架はこの啓示の中心にあります。もし、「鏡におぼろに映ったもの」（I コリ 13：12）しか見ていない私たちが十字架を見て驚嘆しているとすれば、イエスの受肉と受難以前からイエスを親しく知っている存在者たちはなおさらではないでしょうか。間接的に、また私たちの場合とは異なった意味で、十字架上のキリストの死はこれらの存在者たちにとっても祝福となったはずで

日曜日

宇宙の戦い

3月20日

問1 次の聖句を読み、それらが争闘についてどんなことを教えているか考えてください(だれが大争闘にかかわっているか、大争闘がどのように現されているか、大争闘の争点は何か、大争闘がどこで戦われたか、また戦われているか、だれが勝利するか)。創3:15、ヨブ1:6～12、イザ14:12～15、ゼカ3:1～10、マタ4:1、25:41、ロマ16:20、Iコリ15:57、エフェ6:12、Iペト5:8、9、黙12:7～17

エレン・ホワイトを通して与えられた数々の洞察に満ちた言葉のほかに、聖書はあちこちで大争闘に言及しています。上記の聖句は、いわば「宇宙の戦い」、つまりこの宇宙のどこかで始まり、現在この地上で続いている文字通りの戦いに関する描写の一例に過ぎません。

この争闘は聖書の初めから終わりまで、つまり主によってサタンと人類の間に敵意が初めて人間の心に植えつけられたとき(創3:15)から、終わりの時にサタンの怒りが「神の掟を守る者たちに現される時(黙12:17)まで続きます。

しかし、喜ばしいことに、この戦いの結果は世の初めから保証されています(エフェ1:4、黙13:8)。神にとっての問題は、サタンに勝利することができるか否かではなく、むしろどのように、どのような代償を払ってサタンを打ち破るか、でした。十字架は、ほかの何ものにも増して、神御自身の払われた代償をはっきりと示しています。

◆ あなたは毎日の生活の中で大争闘の現実をどのように実感していますか。大争闘の結果が保証されているという確信は、この厳しい戦いに立ち向かう上でどんな支えになりますか。

問2 ヨハネ12:31～33、ヘブライ2:14、ヨハネIの3:8を読んでください。これらの聖句は十字架をサタンの最終的な滅びとどのように関連づけていますか。

十字架において、大争闘の決定的な瞬間が訪れます。サタンは「追放され」、拒絶され、暴露されました。使徒ヨハネは幻の中で次のような声を聞きます。「今や、我々の神の救いと力と支配が現れた。神のメシアの権威が現れた。我々の兄弟たちを告発する者、昼も夜も我々の神の御前で彼らを告発する者が、投げ落とされたからである」(黙12:10)。救い主が「全世界の罪を贖う」(Iヨハ2:2)のために死なれたときに初めて、天は、**今や、救いが現れた**と宣言することができるのでした。創世記3:15に初めて言及されている神の約束はカルバリーにおいて実現しました。

問3 キリストの犠牲の死は大争闘とどんな関係にありますか。

すでに学んだように、キリストは罪がなかったにもかかわらず、私たちの罪を負い、神の裁きのもとで死なれました(イザ53:6、11、12、Iペト2:24、3:18)。十字架において、神は罪に対する御自分の裁きを受け入れられました。創造主は人性をお取りになりました。それは、被造物の命を超越した御自分の命によって全人類の罪を贖うためでした。こうして、キリストの死は道德律の妥当性を支持し、神が品性において正義と憐れみに満ちたお方であることを証明しました。使徒パウロは、特に大争闘に照らして、十字架の意味を次のように説明しています。「神はこのキリストを立てて、その血による、信仰をもって受くべきあがないの供え物とされた。それは神の義を示すためであった。すなわち、今までに犯された罪を、神は忍耐をもって見のがしておられたが[旧約時代の道德的罪は実際には動物の血によって贖われることがなかった(ヘブ10:4)]、それは、今の時に、神の義を[人類と墮落しなかった諸世界の前に]示すためであった。こうして、神みずからが義となり、さらに、イエスを信じる者を義とされるのである」(ロマ3:25、26、口語訳)。

火曜日

十字架と人間の苦しみ(その1)

3月22日

十字架と、十字架のゆえに私たちに与えられている救いは、大争闘を理解する鍵です。十字架は律法の妥当性を支持し、同時に律法を犯した者たちに救いを提供しました。これらのことは、宇宙の住民の前における、サタンの神に対する非難に答える上で欠かせないものでした。宇宙の住民も大争闘の結果に利害関係があります（ロマ8：22参照）。

問4 黙示録5：11～14を読んでください。この出来事はどこで起こっていますか。だれが登場しますか。彼らはだれを賛美していますか。これらの聖句は、十字架が大争闘の中心であることをどのように教えていますか。

全宇宙が、十字架と大争闘にどれほど深くかわかり、心からの関心を抱いていたとしても、贖いがこの地上で、人間のために達成されたことを忘れてはなりません。キリストは天使の性質ではなく、人間の性質を取られたのです（ヘブ2：16）。天使ではなく、人間を救うために来られたからです。十字架とそれに伴うあらゆる出来事（復活を含む）がなければ、人類は永遠に忘れ去られていたはずでした。

問5 イエスはヨハネ12：32で、御自分の死がすべての人を御自分のもとへ引き寄せる、と言っておられます。これは何を意味しますか。十字架の何が人々をイエスに引き寄せるのでしょうか。

キリストが人性をお取りになったことは、救いの計画にとって欠かせないことでしたが、それでも人間を救うためには不十分でした。永遠の計画によれば（Ⅱテモ1：9）、キリストはその人性と神性において、世の罪と、それらの罪に内在するあらゆる罪責と苦しみを負って、世のために死なれることになっていました。十字架において、あらゆる罪が神の御子に負わせられました。宇宙の住民にとって、罪のない彼らの司令官が自ら、墮落した人類のために苦しむ姿は、何と信じがたい光景だったことでしょう。十字架の主たる目的は人間を救うことでしたが、それはまた宇宙に神の品性を啓示しました。

クリスチャンが直面する難題の一つは苦しみの問題です。もし全能の愛の神がおられるのなら、なぜこれほど多くの苦しみが存在するのでしょうか。クリスチャンならだれでも、自分の信仰にふりかかるこの厄介な問題に苦しんでいるはずです。

もちろん、善と悪の戦いという大争闘の主題は、苦しみの背景にある根本的な問題を理解する助けにはなりません。私たちはまた、この大争闘がやがて神の品性を擁護するかたちで終了することも知っています。しかしながら、それでもなお、苦しみの問題は今もなお私たちに苦しめています。現時点において、私たちが納得させるだけの、現実的な解答が見いだせないからです。

問6 ヨブ記1、2、42章を読んでください。この物語は人間の苦しみの背後にある大争闘を理解する上でどんな助けになりますか。それでも、ヨブの苦しみを完全に説明することができないのはなぜですか。

ヨブの苦しみ、またほかのだれかの苦しみについて考える場合、次のことを心に留める必要があります。それは、すべての人間の苦しみが個人的な苦しみであるということです。自分のために泣こうが、他人のために泣こうが、流すのは自分自身の涙です。いかに親しい人であっても、他人の神経に分け入って、その人の苦痛や嘆きを感じ取ることはできません。他人の苦しみも、所詮、自分の苦しみであって、自分の知り得る範囲のものでしかありません。私たちが経験するのは自分自身の苦しみであって、決して他人の苦しみではありません。ひとりで苦しみ死のうが、集団で苦しみ死のうが、その苦しみの決してその人自身の代謝の範囲を超えるものではありません。私たちは決して自分自身の狂乱した細胞の伝える苦しみ以上のものを経験することはありません。個人の苦しみ以上の苦しみを経験した人はだれもいません。死とはその境界線を越えることです。

木曜日

十字架と人間の苦しみ(その3)

3月24日

「彼が担ったのはわたしたちの病 彼が負ったのはわたしたちの痛みであった」(イザ53:4)。

ここまで、すべての人間の痛みと苦しみが罪から来ることを学びました。また、私たちが知っているのは自分自身の痛み・苦しみだけであって、決して他人のそれではないことも学びました。人間の苦しみはいつでも個人の苦しみであって、それ以外のものではありません。最後に、十字架において、全世界の罪(と全世界の苦しみの原因)がイエスの上に置かれたことを学びました。

問7 これらのことを念頭において、イザヤ書53:1～12を読んでください(特に4節に注目してください)。イザヤ書53章(特に4節)は、神ご自身が罪のゆえに大争闘において何に苦しめられたと述べていますか。

私たちは自分自身の痛みと苦しみしか知りませんが、神は十字架においてそれらのすべてを、一度にお感じになりました。私たちが個人的にしか知らないものを、主は十字架において集団的にお感じになりました。主はカルバリーにおいて、人間の本质、つまり人間の苦しみを通して御自身を私たちに結びつけられました。しかも、主の経験された苦しみの程度は、ほかのいかなる人間の痛みもとうてい及ばないものでした。

したがって、大争闘が終わり、すべての問題が解決するとき、自分は神以上の痛みを経験した、と言える人はだれひとりいません。サタンを引き起こした問題を正義と憐れみに満ちた方法で解決するために、主御自身がいかなる人間も経験したことのない痛みを進んで受けられたことを、主は十字架によって人類と傍観する宇宙の前に示されたのです。主は私たちの痛みと悲しみを担われました。私たちが個人として感じるすべての痛みと悲しみを、主は一度に感じられました。

「限りない知恵を持っておられる神は、われわれの救いのためには、み子の死よりほかに方法を考え出すことがおできにならなかった。この犠牲に対する報いは、きよく幸福で不死の身となって贖われた者たちを、地に住ませるといふ喜びである。救い主が悪の権力と戦われた結果は、贖われた者たちに与えられる喜びであり、永遠にわたって神にみ栄えを帰することである。魂にはこのように大きな価値があるので、天父は、払われた価に満足される。そして、キリストご自身も、その大きな犠牲の実をごらんになって満足されるのである」（『各時代の争闘』下巻434ページ）。

「サタンは自分の仮面が引きはがされたことを知った。彼の統治は墮落していない天使たちと天の宇宙の前に公開された。彼は殺人者の正体を現した。神のみ子の血を流すことによって、彼は天の住民の同情をまったく失ってしまった。……サタンと天の世界との間の同情という最後のつながりが断ち切られた」（『各時代の希望』下巻286、287ページ）。

私たちの身の周りには、しばしば心の痛むような不幸な事件、また目をおおいたくなるような悲惨な事件が起っています。全能の神、しかも愛の神が支配しておられるなら、どうしてこんなことが起るのかと問われると、答に窮するようなことがしばしばあります。すべての人を納得させるような解答は、この地上においては出せないのかもしれませんが。

しかし、私たちには、少なくとも、自分のうちに、信仰による問題の解消を得ることが許されています。その鍵は十字架のキリストの死にあります。実は、人類の歴史における最大の不条理は、罪のない神の御子が、人類の罪を全部背負って罪そのものとなり、あの十字架にかかって死んだことです。キリストの死のおかげで、キリストを信じる者は、たといこの地上で理由のわからない（たいていサタンがかかわっているはずですが）不条理な苦しみや不幸を味わうことがあっても、その苦しみは一時的であり、死ですら一瞬の眠りであって、キリストのご再臨の時に復活する希望を持つことができます。

キリストとサタンの争闘はすでに決着がついており、キリストの勝利が確定しています。キリストを信じ、キリストとの生きたつながりを持ち続ける限り、私たちも勝利が確定しています。この復活の保証が与えられているおかげで、私たちは苦しみの中にも希望を持ち、戦いの中にあっても、安んじていられます。このすばらしい救いに入れていただいたことを心から神に感謝したいと思います。この復活の保証が与えられているおかげで、私たちは苦しみの中にも希望を持ち、戦いの中にあっても、安んじていられます。このすばらしい救いに入れていただいたことを心から神に感謝したいと思います。

—〈寄稿メッセージ〉—

聖書研究ガイドを深く学ぶための副読本!!

今期の副読本

●十字架と贖い (仮題)

私たちクリスチャンにとって、何としても正しく把握したい救いの奥義、「十字架と贖い」です。本書は、聖書研究ガイドと同じ著者によって書き下ろされました。「十字架にかけられたキリスト。それを語り、それを祈り、それを歌いなさい」(『教会への証し』第6巻67ページ)。この「奥義」に触れるためには、即席の学び、スピード時代の簡便さでは足りません。聖書研究ガイドと副読本を合わせてご利用ください。すべてのクリスチャンが確信を持って把握すべき信仰の内実と体験を、ご一緒に求めましょう。

2003年第1期の副読本

●約束——神の永遠の契約

2003年第2期の副読本

●神の赦しの賜物

2003年第3期の副読本

●イエスと聖所

——ヘブライ人への手紙

2003年第4期の副読本

●ヨナ書——驚嘆すべき神の愛、支配、救い

2004年第2期の副読本

●悲しみの人

——イザヤ書における神と救い

※2004年第1期副読本『ヨハネ——愛された福音書』は完売いたしました。



2004年第3期副読本

●宗教と人間関係

永遠の課題である人間関係。多くの方がこのテーマゆえに聖書研究ガイドに関心を持ってくださいました。そのガイドをもっと深く学べるよう、ガイドとは別の視点から12人の方々によって書き下ろされた13の章からなる副読本です。そこからすでに多くの祝福をお受けになった方もたくさんおられると思います。しかし、その時に手にされなかった皆さん、この副読本はいつ読んでも、知恵と教訓に富んだものです。ぜひ、今からでもご購入ください。この副読本を読んだだけでも得るものが間違いなくたくさんあります。



2004年第4期副読本

●ダニエル書

私たちSDAにとってかけがえのない励まし書「ダニエル書」。前期の聖書研究ガイドの副読本です。購入する機会を失った方へ是非とも申し上げます。失われたのはこの副読本を購入する機会ではなく、私たちに今与えられている希望の理由を、聖書的に説明する知恵と理解を得る機会です。SDAとして、一般キリスト教書では決して解き明かされない、かけがえのない「ダニエル書」の解説です。今からでも、一冊あなたの書棚にどうぞ。

A5判 定価 945 円 (本体 900 円 + 税 5%)

安息日学校部企画 福音社編集部編 福音社発行

ご注文はABCまで

2005年度 日没表

月/日	札幌	仙台	東京	名古屋	大阪	広島	福岡	鹿児島	沖縄
12/31	4:10	4:27	4:38	4:51	4:58	5:11	5:21	5:25	5:48
1/7	4:16	4:32	4:43	4:56	5:03	5:16	5:26	5:30	5:52
14	4:24	4:38	4:50	5:02	5:09	5:22	5:32	5:36	5:57
21	4:32	4:46	4:56	5:09	5:16	5:28	5:38	5:42	6:03
28	4:41	4:54	5:04	5:16	5:23	5:35	5:45	5:48	6:09
2/4	4:50	5:01	5:11	5:23	5:30	5:42	5:52	5:55	6:14
11	4:59	5:09	5:18	5:30	5:37	5:49	5:58	6:01	6:19
18	5:08	5:17	5:25	5:37	5:43	5:56	6:05	6:06	6:24
25	5:18	5:25	5:32	5:44	5:50	6:02	6:11	6:12	6:28
3/4	5:26	5:32	5:38	5:50	5:56	6:08	6:17	6:17	6:32
11	5:35	5:39	5:44	5:56	6:02	6:14	6:22	6:22	6:36
18	5:43	5:45	5:50	6:02	6:08	6:20	6:28	6:27	6:39
25	5:52	5:52	5:56	6:07	6:13	6:25	6:33	6:32	6:43

2005年第2期研究予告

総題 『マルコの見たいエス』 (マルコによる福音書)

第1課 御子イエスの紹介

日曜日 著者、ヨハネ・マルコ

月曜日 福音書の始まり (マコ1:1)

火曜日 使者 (マコ1:2~8)

水曜日 任命

木曜日 伝道の始まり (マコ1:14~20)

(著者) ウィリアム・G・ジョンソン
(『アドベンチスト・レビュー』編集長)

今期の参考書

● ホワイト選集7 各時代の希望 下巻 (65～82章)

A 5判 定価 3,247円 (本体 3,093円+税5%) (信徒価格) 福音社発行

● 生き残る人々 (現在絶版)

絶版ですので、ご自分で持っていらっしゃる方、あるいは、教会の図書として備わっているならば、この機会にご利用なさってください。

● ザ・クロス——イエスはなぜ十字架を選んだのか

マックス・ルケード著

B 6判 定価 1,575円 (本体 1,500円+税5%) いのちのことば社発行

多くの人に読まれている現代の作家、ルケード牧師が現代的タッチで語るキリストの十字架物語。

● 無力の力強さ——ユンゲル・モルトマン説教集

田村信吾・蓮見和男 共訳

四六判 定価 2,730円 (本体 2,600円+税5%) 新教出版社発行

高名な神学者が説く、「無力な」人類への唯一の希望をもたらす神の業の説教集。4章からなる全編の、第3章に十字架についての説教集あり。

以下の2冊は「赦し」を実際の生活に実行することのすばらしさを表した本です。

● 憎み続ける苦しみから人生を取り戻した人々の物語

ヨハン・クリストファー・アーノルド 著

四六判 定価 1,575円 (本体 1,500円+税5%) いのちのことば社発行

赦せないはずの人々が赦しによって得た“奇跡”を紹介する実話集。

● 愛は裁かず——子どもが立ち直る決め手となったもの

伊藤重平 著

B 6判 定価 1,785円 (本体 1,700円+税5%) 黎明書房発行

熱心なクリスチャン・カウンセラーの立場から家庭裁判所主任調査官として活動した経験のなかで、親子間の赦しの大切さを教える胸打つ実話集。

※お申し込みは各教会の書籍係へお願いします。

安息日学校聖書研究ガイド

定 価

発 行 日

原 作 版 発 行

日本語版発行

十字架と贖い

460円 (本体 439円+税)

2004年12月24日

セブンスデー・アドベンチスト

世界総会安息日学校・信徒伝道部

教団安息日学校・信徒伝道部

〒190-0011 立川市高松町 3-21-8

中央アメリカ支部



教団	教会 1	集会所	教員	人口
中央アメリカ支部所属				
カリブ	536	101	185,950	3,522,158
コロンビア	914	775	210,441	44,172,000
キューバ	241	335	23,325	11,279,000
ドミニカ	553	526	200,056	8,716,000
フランス領アンチル・ギアナ	117	45	26,739	1,015,000
ハイチ	818	608	273,586	7,528,000
アンダー・ネーション・メキシコ	1681	1,681	152,372	27,268,280
ミッド・セントラル・アメリカ	620	176	266,370	13,516,000
ノース・セントラル・アメリカ	571	139	167,351	12,631,000
メキシコ	475	754	138,912	69,219,480
プエルトリコ	274	30	34,414	3,879,000
サウス・セントラル・アメリカ	512	74	153,494	12,634,000
サウス・メキシコ	697	2,231	245,051	8,390,240
ベネズエラ・アンチル	549	336	127,989	25,935,842
ウエスト・アンチル	646	79	215,889	3,018,000
合計 (03,12,31)	7,889	7,890	2,422,050	252,724,000

- 計 画
- ① ホイヌ・オア・ホア放逐員の撤張 (ハイチ)
 - ② 信徒訓練用伝道センター (ハイチ)
 - ③ 未開拓地における伝道の推進 (ハイチ)
 - ④ アンチアン・アドベンチスト大学の女子寮 (プエルトリコ)